

教育学研究科教員業績一覧

(2005年10月1日～2006年9月30日)

教育学コース

川本隆史(教授)

<著書(編著)>

- ・『リーディングス環境 第三巻：生活と運動』(淡路剛久, 植田和弘, 長谷川公一氏との共編)有斐閣, 2005年11月, 375ページ
- ・『リーディングス環境 第二巻：権利と価値』(淡路剛久, 植田和弘, 長谷川公一氏との共編)有斐閣, 2006年2月, 400ページ
- ・『リーディングス環境 第四巻：法・経済・政策』(淡路剛久, 植田和弘, 長谷川公一氏との共編)有斐閣, 2006年5月, 466ページ
- ・『リーディングス環境 第五巻：持続可能な発展』(淡路剛久, 植田和弘, 長谷川公一氏との共編)有斐閣, 2006年9月, 357ページ

<論文(単著)>

- ・「久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』, 岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編『戦後思想の名著50』, 平凡社, 2006年2月, 181-197ページ
- ・「ケアへの規範的アプローチ——その隘路と突破口についての覚え書」, 『研究室紀要』第32号, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室, 2006年6月, 71-80ページ

<講演および報告>

- ・「学び・ケア・幸福——パーソナルな関心からスタートして社会倫理へ」(共働研究会「学びとケアと幸福」2005年11月20日: 国立京都国際会館)
- ・「ケアと自己決定——高齢者介護をめぐる」(公開シンポジウム「ケアと自己決定」, 2005年11月26日: 東京大学医学部大講堂)
- ・「ケアと自己決定の《間》——『ケアの社会倫理学』を編集して」(ブリコラージュ・セミナー, 2006年3月4日: 全林野会館)
- ・「経験・抵抗・理性——三人の《どう生きるか》に学ぶ」(慶応義塾大学教職課程センター公開研究会, 2006年3月23日: 慶応義塾大学三田キャンパス大学院棟311番教室)

今井康雄(助教授)

<論文(単著)>

- “Elemente des Widerstandes in der Medienpädagogik Adolf Reichweins”, in: *Zeitschrift für Erziehungswissenschaft*, 8. Jg., Nr. 3, 2005.10, S.443-463.
- 「情報化時代の力の行方——ウイトゲンシュタインの後期哲学をてがかりとして」『教育学研究』第73巻第2号, 2006年6月, 98-109頁。
- 「<教育とメディア>の歴史的編成——ペスタロッチからバウハウスまで」『日本の教育史学』第49集, 2006年9月, 188-192頁。
- 「「自由」に対して責任を負うとはどういうことか——金森フォーラムに関するコメント」『近代教育フォーラム』第15号, 2006年9月, 61-70頁。

<書評>

- 森田伸子『文字の経験——読むことと書くこと』, 『近代教育フォーラム』第15号, 2006年9月, 239-246頁。

<その他>

- 「教職をあきらめて」『進学情報センターニュース』(東京大学教養学部進学情報センター), 第45号, 2006年9月, 2-3頁。

西平直(助教授)

<論文>

- 1, 「アイデンティティとスピリチュアリティ」『現代と親鸞』第9号, 親鸞仏教センター, 2005年12月, 53-110頁。
- 2, 「身体性(からだ)の哲学」『放送大学大学院教材現代身体教育論』放送大学教育振興会, 2006年, 112-122頁。
- 3, 「熱中すること・醒めること——エリクソンの理論地平から」『児童心理』金子書房, 2006年8月。

<その他>

- 1, 新聞連載: 『山梨日日新聞』「競争しない自由」10月9日, 「流れる水は腐らない」11月13日, 「疑うことと信じること」12月18日, 「緊張・無心・自然体」1月29日, 「自分を信じる」3月5日。
- 2, 「競争・自信・劣等感——競争心をめぐって」『教

育展望』51-1, 2006年

3, 「実生活の中で働く霊性—マルタとマリアをめぐる」『福音と世界』新教出版社, 2006年9月。

4, 「コラム：いのちの教育—常にその批判と共に」『高野山大学選書第三巻・現代に密教を問う』小学館スクウェア, 2006年9月。

<書評・図書紹介>

1, 菱刈晃夫『近代教育思想の源流—スピリチュアリティと教育』成文社, 『教育哲学研究』第93号, 2006年5月。

2, 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房, 『教育学研究』73-3号 2006年9月

吉長真子(助手)

<論文>

「恩賜財団愛育会による愛育村事業の創設と展開—1930年代の農山漁村における妊産婦・乳幼児保護運動—」東京大学大学院教育学研究科教育学研究室『研究室紀要』第32号, 2006年6月, 1~16頁。

<学会発表>

「1930年代の日本における農村の「産育習俗問題」—恩賜財団愛育会の愛育村事業と産育習俗調査から—」比較家族史学会秋季研究大会(2005年11月12日 於摂南大学)。

「恩賜財団愛育会による愛育村事業の創設と展開—1930年代の農山漁村における妊産婦・乳幼児保護運動—」社会事業史学会第8回大会(2006年5月13日 於龍谷大学短期大学部)。

谷本宗生(助手)

<著書>

「大学アーカイヴズのあゆみ」全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会, 2005年12月, 21~37頁(桑尾光太郎と共著)。

「「学都」金沢形成の端緒—第四高等学校の誘致獲得を中心に—」橋本哲哉編『近代日本の地方都市—金沢/城下町から近代都市へ—』日本経済評論社, 2006年5月, 349~384頁。

<雑誌論文>

「面目をかけた四高誘致, 前田家が大金を寄付 高等教育に地元の熱意」『北國文華』第29号, 北國新聞社, 2006年9月, 29~36頁。

<報告書>

「個人情報に関する学校や地域等での資料所蔵につ

いて」日本教育学会個人情報の保護と利用に関する委員会『教育研究における個人情報保護問題—史資料の問題を中心に—』(個人情報の保護と利用に関する委員会中間報告書)2006年8月, 38~45頁。

<紹介>

「本学関係史料の紹介：大学改革準備調査会第一次報告書」東京大学史料の保存に関する委員会編『東京大学史紀要』第24号, 東京大学史史料室, 2006年3月, 21~25頁。

「『渡邊洪基史料目録』の発刊に際して」『東京大学史史料室ニュース』第35号, 東京大学史史料室, 2005年11月, 5~6頁。

「本郷キャンパス史の探訪：育徳園丘上の碑と赤門鬼瓦の「學」に関して」『東京大学史史料室ニュース』第36号, 東京大学史史料室, 2006年3月, 5~6頁(細谷恵子と共著)。

「東京大学予備門試業問題(1878年度)」『ニューズレター』第14号, 1880年代教育史研究会, 2006年1月, 5頁。

「第四高等学校校医学部薬学科の設置について」『ニューズレター』第15号, 1880年代教育史研究会, 2006年4月, 2頁。

「金沢の高等学校誘致の背景・事情について—先行研究から考える—」『ニューズレター』第16号, 1880年代教育史研究会, 2006年7月, 2~3頁。

比較教育社会学コース

荻谷剛彦(教授)

<単著>

『学校って何だろう：教育の社会学入門』2005 筑摩書房 248p

<共著>

『脱「中央」の選択：地域から教育課題を立ち上げる：検証地方分権化時代の教育改革』荻谷剛彦, 清水睦美, 藤田武志, 堀健志, 松田洋介, 山田哲也 2005 岩波書店

『変化する社会の不平等：少子高齢化にひそむ格差』白波瀬佐和子編 2006 東京大学出版会

<編著>

『いまこの国で大人になるということ』2006 紀伊國屋書店

<論文>

「社会学教科書の比較社会学—大学における教授—学習過程と知識の社会的構成」『社会学評論』56(3)

- 号 日本社会学会 pp.626-640.
- 「日本の針路(最終回)“学ぶ力”を維持する政策 教育の地域差, 階層差が拡大 土曜日や退職教員の再活用を」『週刊ダイヤモンド』第93(44)号(2005年11月12日号) ダイヤモンド社 pp.94-99.
- 「3年予測 教育 脱中央の流れ強まる公教育改革 地方の財政力の差が教育格差に」『週刊ダイヤモンド』第94(1)号(2005年12月31日・2006年1月7日合併号) ダイヤモンド社 pp.135.
- 「『教育の地殻変動』と教育政策」『Research Bureau 論究』第2号(2006年1月号)衆議院調査局 pp.13-21.
- 「学歴社会から学習資本主義社会へ: 「自ら学ぶ力」べた褒め社会の光と影」『中央公論』2006年3月号 中央公論新社 pp.234-235.
- 「教育振興基本計画 “抱き合わせ”改正にどう対処するか」『世界』第754号(2006年7月号) 岩波書店 pp.100-107.
- <対談>
- 「緊急アピール! 分権化の踏み絵にするな——どうする義務教育費国庫負担制度」荻谷剛彦, 土居文明, 妹尾涉他『論座』第125号(2005年10月号) 朝日新聞社 pp.136-145.
- 「匿名座談会 執筆・検定・採択から製作の実態まで」『論座』第126号(2005年11月号)朝日新聞社 pp.194-210.
- 「驚愕とポーゼンの座談会を終えて」『論座』第126号(2005年11月号) 朝日新聞社 pp.211-213.
- 「教育は民主主義の根幹/ 荻谷剛彦述」『今こそローカリズム: 石田芳弘対談集』石田芳弘著 2006 風媒社.

<新聞>

- 「義務教育費国庫負担 私の考え4『答申, 分権に逆行せず』」『日本経済新聞』2005年11月28日
- 「ハイテーブルと教養」『東京新聞』2006年1月20日
- 「『考える力』問う流れ定着」『読売新聞』2006年7月15日

<書評>

- 大貫恵美子著『学徒兵の精神誌』(岩波書店)『朝日新聞』2006年3月26日
- ポリー・トインビー著『ハードワーク』(東洋経済新報社)『朝日新聞』2006年4月2日

白石 さ や(教授)

<学会発表・講演・研究会報告等>

- 2005年10月22日 東京国際フォーラム
国際教育交流促進協会主催
国際理解教育セミナー2005 in Tokyo
講演: 『ドラえもんに行くアジアの旅: ピースカルチャーを創る』
- 2005年12月14日 インドネシア大学日本研究センター
One-Day Public Seminar “Indonesia-Japan: Establishing New Linkages through Research and Education”
講演 “Youth Culture, Globalization and Civil Society: Towards a Comparative Study on Japan and Indonesia”
- 2006年2月23日 華東師範大学(上海)
国際教育研究前沿系列講座講演会 (Educational Sciences: Lecture on Latent Development in Educational Research)
講演『マンガ・アニメのグローバル化の構造を考える』
- 2006年3月16日 国際日本文化研究センター
第28回国際研究集会
「売る文化, 売られた文化: テレビコマーシャルによる文化研究を探る」
報告『キャラクターを売る・キャラクターで売る (Selling Characters/ Selling with Characters)』
- 2006年3月27日 IPC 生産性国際交流センター(湘南国際村)
「ジェンダーの政治過程: 戦争と民主主義の国際比較」研究会
報告『ジェンダーとインドネシアの家族主義』
- 2006年7月19日 National University of Singapore
Asia Pacific Childhoods: An “Ethnography of Childhood” Workshop
報告: “Republic of Children and Robots: The World of Japan’s post WWII Manga and Anime” [Symposium 3, Change and Continuity in Asia-Pacific Childhood: “Children’s Agency as Participants in Media Production”]
- 2006年10月28日 金沢大学
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
共同研究プロジェクト
「インドネシアの国語政策と言語状況の変化」
報告『インドネシア語と国民文化の創造/ 想像』
- 2006年11月13日 早稲田大学
第9回「東アジアにおける人と文化の国際移動」研究

会

報告：『東アジアにおける大衆文化の共有』

<報告書・その他>

「インドネシア大学日本研究センター支援計画第三フェーズ：マスメディアと市民社会」プロジェクト指導報告 JICA(国際協力機構)技術協力専門家としてインドネシア派遣—2005年12月；2006年5-6月；2006年8月)

ASNET(Asian Studies Network)・EALAI(東アジア・リベラル・アーツ・イニシアティブ) 共催 日本アジア学講座『アジアから考える世界史』2006年夏学期特別講義

東文研国際セミナー『歴史とはなにか?』企画・座長(2006年7月6日 於東京大学)

日本オーラルヒストリー学会第四回大会

『植民地支配と史料論』分科会座長・ニューズレター報告(2006年9月24日 於東京外国語大学)

外務省海外交流審議会ポップカルチャー専門部会報告『文化外交におけるポップカルチャーの活用』(2006年11月)

矢野 眞 和(教授)

<単著(訳本)>

『高等教育的経済分析と政策』(張曉鵬編訳) 北京大学出版社 2006.8

<論文>

「評価以前の研究」『大学評価研究』(第5号) 2006.5

「社会生活基本調査への期待」『統計』(7月号) 2006.7

「改革から政策へ」『論座』(8月号) 2006.7

「大学の教育とキャリア形成」『IDE 現代の高等教育』(No.483) 2006.8

<雑誌論文>

「若者と仕事」(鼎談)『世界』(6月号) 2006.5

「大学の教育は出世に関係するか」(濱中淳子と共著)『カレッジマネジメント』2006.5

「大学を変える—国際教養大学の挑戦」『カレッジマネジメント』2005.11

「大学を変える—聖徳大学の挑戦」『カレッジマネジメント』2006.3

「大学を変える—青森公立大学の挑戦」『カレッジマネジメント』2006.5

<国際会議・学会発表・その他>

「改革から政策へ」第2回日中高等教育フォーラム基調講演(広島大学) 2005.11

「なぜ大学に進学しないのか」大学経営政策研究センターシンポジウム 2006.7

「30代の悲劇」『日本労働研究雑誌』(提言) 2006.7

恒吉 僚子(助教授)

「国際比較の中の日本型学力」基礎学力研究開発センター編『日本の基礎学力：危機の構図と改革への展望』, 明石書店, 2006, 92-106.

Christopher Bjork and Ryoko Tsuneyoshi, “Education Reform in Japan: Competing Visions for the Future,” *Phi Delta Kappan*, April 2005: 619-626.

「支配としての英語, 文化としての英語, 戦略としての英語」『国際化戦略としての英語の教授用語化—短期留学プログラムの多国間比較研究』(代表: 恒吉) 基盤研究 B(2)15330174, 2006年, 1-12.

「大学国際化への実験—東京大学短期留学プログラムを切り口に」『国際化戦略としての英語の教授用語化—短期留学プログラムの多国間比較研究』(代表: 恒吉) 基盤研究 B(2)15330174, 2006年, 52-79.

“Teaching for ‘Thinking’ in Four Nations: Singapore, China, The United States, and Japan,” pp.39-69 in the Core Academic Competences: Policy Issues and Educational Reform (第四回, 国際シンポジウム報告書), 基礎学力研究開発センター, 2006年.

“Internal Internationalization and the Emerging Multicultural Outlook in Japan: The Impact of the New Foreigners.” 国際学術研討会論文集, 2006, pp.38-58, 中華民国課程興教学学会.

「中等教育・貫校における生徒および保護者の学習環境に関する意識調査」藤田慶子・秋田喜代美・恒吉僚子・村瀬公 基礎学力研究開発センター Vol.23, 2006.

西島 央(助手)

<論文>

・「中学校部活動の制度的変化と『活動参加状況』に関する教育社会学的考察—家庭の経済的背景に注目して—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第45巻, 2006年3月, 49-66頁。(西島央・中澤篤史による共著。分担執筆部分: 「I 本稿の課題とその背景」, 「III 分析概念の設定—活動参加状況の四類型」, 「IV 活動参加状況と学校生活への関わり方」, 「VI おわりに」。)

<科学研究費補助金報告書>

- ・『楽器・唱歌室からみた唱歌教育の普及過程—明治20年代の長野県を事例に—』研究代表者：西島央，平成15～16年度文部科学省科学研究費補助金萌芽研究「戦前期小学校における音楽授業に関する文化社会学的研究—『奏でられた音』を音楽室の配置やつくり，備品・消耗品・教具類から探る—」研究成果報告書。2006年5月，本文全64頁(史料集27頁を含む)。

<その他>

- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(2)「将来か今か」の背景」『私学中等教育』第111号，(株)森上教育研究所，2005年10月，6頁。
- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(3)「将来か今か」と学校生活」『私学中等教育』第112号，(株)森上教育研究所，2005年11月，8頁。
- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(4)学校満足度の規定因」『私学中等教育』第113号，(株)森上教育研究所，2005年12月，8頁。
- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(5)～学校満足度を決める学校への誇り」『私学中等教育』第114号，(株)森上教育研究所，2006年1月，6頁。
- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(6)～自己肯定感と成績の関係」『私学中等教育』第116号，(株)森上教育研究所，2006年5月，8頁。
- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(7)～自己肯定感のさまざまな規定因」『私学中等教育』第117号，(株)森上教育研究所，2006年6月，8頁。
- ・「『今』を楽しむ中高一貫生の素顔」『エコノミスト』2006年7月11日号，毎日新聞社，2006年7月，30-31頁。
- ・「生徒からみた部活動とこれからの課題」『月刊高校教育』2006年8月号，学事出版，2006年7月，32-39頁。(西島央・藤田武志・中澤篤史による共著。分担執筆部分：「はじめに」，「高校生の部活動参加状況」，「部活動加入者は教師とどう関わっているのか」，「まとめ」。ただし，「まとめ」は，中澤篤史と共著。)
- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(8)～性別役割分業観に対する考え方」『私学中等教育』第118号，(株)森上教育研究所，2006年7月，8頁。
- ・「アンケート調査からみる私立中学生の意識と行動(9)性別役割分業観と学校の影響」『私学中等教

育』第119号，(株)森上教育研究所，2006年9月，18頁。

<学会発表等>

- ・「静岡県の高校部活動の変化と高校生活—学習指導要領改訂前後の比較調査をもとに—」日本教育社会学会第58回大会 於大阪教育大学，2006年9月23日。(○西島央・○中澤篤史・藤田武志・矢野博之・宮本幸子による共同発表。)

<社会貢献活動>

- ・日本教育社会学会 事務局庶務部副部長 総務担当，2005年9月～。
- ・「Do Music!～音楽の発見～」於私立聖徳学園中学校，2006年2月18日。(非常勤講師で担当している東京芸術大学音楽学部「教育方法学」受講生有志によるアウトリーチ活動。)

大多和 直 樹(助手)

<論文・報告書>

- 「生徒文化と社会観」『JELS 報告書』(お茶の水大学 COE 誕生から死までの人間発達科学) No.8
- 「生徒支援型学校～支援化する学校と社会統制メカニズムの変容」および「フリーター・グループインタビューを通じて～自己実現アノミーとしての無支援」『フリーター層の行動様式と支援システムの研究—社会統制の視点から』(平成16年度社会安全研究財団・報告書)

<書評>

- 「浅野智彦編『検証・若者の変貌—失われた10年の後に』」『教育と文化』第45号

<学会発表>

- 千葉昭吾・大多和直樹「選択支援機関としての進路多様校における配分メカニズム—高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究(4)—」日本教育社会学会第58回大会
- 西森年寿・大多和直樹・望月俊男・中原淳・岡本和夫・山内祐平「高等教育におけるオンライン授業カタログシステムの設計」日本教育工学会第22回全国大会
- 「シンポジウム：格差社会と犯罪研究 教育社会学の立場から」日本犯罪社会学会第33回大会

両 角 亜希子(助手)

<論文>

- 「日本の教育費の特徴は？」全国保育団体連絡会『ちいさいなかま』12月号 No.478 2005年12月

「米国都市型大学における地域コミュニティとの関係—ペンシルバニア大学の事例—」『三田評論』慶應義塾大学(2006年11月)

<学会発表>

「私立大学における拡大・縮小行動と資産の形成—1980年代後半以降に注目して—」日本高等教育学会第9回大会(2006年6月3日, 国立大学財務・経営センター)

教育心理学コース

市川伸一(教授)

<著書>

『日本の教育と基礎学力—危機の構図と改革への展望—』明石書店, 2006(21世紀COEプログラム東京大学大学院教育学研究科基礎学力研究センター編, 「第3章 学力論争における国際学力比較調査の役割」を分担執筆)

<学術論文>

「教育改革の動向から見た科学教育・天文教育のあり方」, 『天文月報』, 2006, 1月号, pp.44-47.

「理科教育における受容学習と問題解決の調和—『先行学習の問題点』を読んで—」, 『初等理科教育』, 2006, 1月号, pp.60-63.

<一般雑誌論文>

「コーディネート力が問われる時代に」『現代教育科学』(明治図書), 2006, 5月号, pp.8-10.

「今, 求められている人間力」『総合教育技術』(小学館), 2006, 6月号, pp.83-85. (談話抄録)

「『人間力』に期待するもの」『教育展望』(教育調査研究所), 2006, 7・8合併号, pp.4-10. (談話抄録)

「『教えて考えさせる授業』をなぜ提唱し続けたのか」『楽しい理科授業』(明治図書), 2006, 9月号, pp.8-11.

南風原朝和(教授)

<学会発表等>

「階層的線形モデルによる個と集団のデータの分析」(ワークショップ「HLM(階層的線形モデル)を用いた個と集団のデータの分析」における話題提供)日本グループ・ダイナミクス学会第53回大会, 2006年5月

「量的研究の側からみた連携への鍵」(シンポジウム『量的分析と質的分析—統合を目指した研究の実際』における指定討論)日本教育心理学会第48回総会, 2006年9月

「テストの妥当性の概念および検証方法の新たな展開」(日本テスト学会公開シンポジウムにおける指定討論)2006年9月

<その他>

「共分散構造分析—強力な解析ツールとその使用上の注意」『心理学ワールド』31号, 22-23頁, 2005年10月

「妥当性」辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦(監修)『教育評価事典』, 図書文化, 2006年6月

針生悦子(助教授)

<論文>

針生悦子 2006「子どもの効率よい語彙獲得を可能にしているもの: 即時マッピングを可能にしているメタ知識とその構築にかかわる要因について」心理学評論, 49(1), pp.78-90.

<学会発表>

針生悦子・趙麗華 2006「日本語における有声音/無声音対比の擬音語と大小の対応づけ: 日中大学生による判断の比較」日本認知科学会第23回大会(中京大学)発表論文集, pp.66-67.

Nagumo, M., Imai, M., Kita, S., Haryu, E. & Kajikawa, S. 2006 Sound iconicity bootstraps verb meaning acquisition. *Paper presented at the 15th Biennial International Conference on Infant Studies (Invited Symposium 'What we can learn by studying infants learning a non-European language: Phonological foundation for word learning in Japanese')*.

<著書>

針生悦子(編著) 2006. 「言語心理学」東京: 朝倉書店 pp.212.

Imai, M, Haryu, E, Okada, H., Li, L. & Shigematsu, J. 2006 Revisiting the noun-verb debate: A crosslinguistic comparison of novel noun and verb learning in English-, Japanese- and Chinese-speaking children. In K. Hirsh-Pasek and R. Golinkoff (Eds.), *Action meets word: How children learn verbs*. New York: Oxford University Press. pp.450-476.

<講演>

針生悦子 2005「子どもによる単語の意味推論」慶應義塾大学 COE シンポジウム「未完成な論理・病んだ論理」(慶應義塾大学)2005年10月22日

臨床心理学コース

亀口憲治(教授)

<著書・編著>

岡堂哲雄編著 臨床心理学入門事典 2005年10月 至文堂

小谷英文編 心の安全空間 2005年10月 至文堂

亀口憲治編著 家族療法 2006年1月 ミネルヴァ書房

亀口憲治訳(Lynn Hoffman 著)家族療法の基礎理論—創始者と主要なアプローチ 2006年3月 朝日出版社

亀口憲治監修 群馬県総合教育センター著 体験型の子育て学習プログラム15—来て良かったと喜ばれる新しい保護者会 2006年6月 図書文化海保博之・楠見孝監修 心理学総合事典 2006年6月 朝倉書店

氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子共編 心理査定実践ハンドブック 2006年9月 創元社

<論文>

多重焦点法を用いた予防カウンセリングの実践事例—授業「総合心理入門」における心理的体験の構造化 東京大学大学院教育学研究科紀要 第45巻, 375-386, 2006年3月

家族イメージ法(FIT)の現状と今後の展望 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 第29集, 221-236, 2006年3月

<学会等発表>

家族カウンセリング21世紀ヴィジョン—家族相談士の未来を拓く 日本家族カウンセリング協会創立20周年記念大会シンポジウム 2005年10月 東京家族療法の理論と実際 浙江大学心理学会招聘講演 2006年3月 中国・杭州・浙江大学

家族と社会の心理学的問題 新世紀科学技術報告会 招聘講演 2006年3月 中国・杭州・浙江省科学技術協会

Clinical Application of FIT(Family Image Technique), International Academy of Family Psychology 5th Conference, June, 10-13, 2006 Cardiff University, Wales, UK

Family Responsibility and Family Relationship in Chinese Youth, International Academy of Family Psychology 5th Conference, June, 10-13, 2006 Cardiff University, Wales, UK

Qualitative Analyses on Generational Boundaries in

Family Image Test, International Academy of Family Psychology 5th Conference, June, 10-13, 2006 Cardiff University, Wales, UK

ワークショップ「家族イメージ法(FIT)について」日本家族心理学会第23回大会 2006年7月 京都・佛教大学

シンポジウム「日本の家族—古来・未来」日本家族心理学会第23回大会 2006年7月 京都・佛教大学 家族療法的カウンセリングの最新技法 日本心理臨床学会第25回大会ワークショップ 2006年9月 大阪・関西大学

<その他>

FIT(家族イメージ法)と粘土法—日本的家族療法の技法 ハートフルかんとう, 第29号, 4-8, 2006年1月

超軽量粘土のことなど 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 第29集, 267-268, 2006年3月

<書評>

草薙敦子著『子どもが壊れる家』, エデュコ, 第9号, 14, 2006年1月

藤岡孝志著『不登校臨床の心理学』, 心理臨床学研究, 第24巻2号, 240-242, 2006年6月

下山晴彦(教授)

<論文>

どのようにして事例の問題を概念化するか。下山晴彦 臨床心理学 5(6) 2005年11月 pp.846-852

どのようにして事例の意味を解明をするか 下山晴彦 臨床心理学 6(1) 2006年1月 pp.90-94

どのようにして介入の方針をたてるのか: アセスメントの作業を整理する 下山晴彦 臨床心理学 6(2) 2006年3月 pp.236-243

事例をどのようにして定式化していくか 下山晴彦 臨床心理学 6(3) 2006年5月 pp.377-382

初回面接では何をするのか(1): 協働関係の形成を中心に 下山晴彦 臨床心理学 6(4) 2006年7月 pp.518-523

初回面接では何をするのか(2): 精神症状を心理機能の障害として把握する 下山晴彦 臨床心理学 6(5) 2006年9月 pp.658-664

対人援助職の感情労働とバーンアウト予防 小堀彩子・下山晴彦 臨床心理学 6(5) 2006年9月 pp.600-605

臨床心理学において役立つ書籍研究 下山晴彦他

東京大学大学院心理教育相談室紀要 2006年 8月
pp.150-180

引きこもり傾向を示す青少年のための心理教育プログラムの開発 下山晴彦他 明治安田こころの健康財団研究助成論文集41 2006年 9月 pp.99-109

<訳書>

子どもと若者のための認知行動療法ワークブック
下山晴彦(監訳) 金剛出版 2006年 8月 pp.207
テキスト臨床心理学4—精神病と物質関連障害 下山晴彦(編訳) 誠信書房 2006年 9月 pp.227

<企画編集>

環境心理学の新しいかたち 南博文(編著) 誠信書房 2006年 3月 pp.308
心理学研究法の新しいかたち 吉田寿夫(編著) 誠信書房 2006年 3月 pp.276

田 中 千穂子(教授)

<著書・共著>

<監修>

<論文>

乳幼児のこころの問題 特集子どものこころの問題：最近の話題と多角的アプローチ 小児内科 vol.38, No.1, 2006 pp.20-23

子どものライフスタイルの変化とこころの健康—子どもは時代を生きる—

特集「ライフスタイルと健康」『学術の動向』2006年 5月号 日本学術会議 pp.53-57

発達心理臨床のエビデンス 現代のエスプリ『臨床心理行為研究セミナー』 pp.83-91

高機能広汎性発達障害の理解と支援 序・時代のはざままで 東京大学心理教育相談室紀要29集 2006年 6月 pp.162-166

<その他の雑誌原稿>

書籍の窓 発達障害の心理臨床 2005年12月 pp.49-52

心理臨床学会報第19号 発達障害の心理臨床の課題 もっと心の痛みへのケアを 2006年 1月 pp.2-3

ダウン症協会の未来—成人期へ目をむける— DS ニュース 400号, 2006年 3月号 p.5

「相手と共にある能力」を育てる」東京大学心理教育相談室紀要29集 2006年 6月 pp.271-273

<その他>

○取材原稿

「不登校・ひきこもり問題, どう対処」日本経済新聞 2006年 7月 4日

<学会活動>

第25回日本心理臨床学会大会 2006年 9月
大会シンポジウム「学会機関誌『心理臨床学研究』の課題をめぐって」

シンポジスト

乳児院における心理療法の愛着形成—一対一の関わりという枠の大切さ—

古屋肇子さんの事例の座長 臨床学会大会論文集 pp.173

中 釜 洋 子(助教授)

<著書>

平木典子との共著『家族の心理—家族への理解を深めるために』サインス社 2006年10月

<分担執筆>

「第5章 中年期夫婦の臨床的問題とその援助」上里一郎監修・岡本祐子編『成人期の危機と心理臨床：壮年期にともなう危険信号とその援助』ゆまに書房 p.187-214 2005年12月

「関係性への心理援助—これからの<家族療法>」村瀬嘉代子監修『家族の変容とこころ』新曜社 p.133-157 2006年 5月

<論文>

「家族心理学の立場からみた子どものこころの問題」小児内科 vol.38, No.1, p.29-33 2006年 1月

「家族のための心理援助—1. 家族のための心理援助とはなにか」臨床心理学 vol.6, No.3. p.383-389 金剛出版 2006年 5月

「家族のための心理援助—2. 家族療法は個人心理療法とどこが異なるか」臨床心理学 vol.6, No.4. p.524-530 金剛出版 2006年 7月

「家族のための心理援助—3. 言動の視点から家族と関わる」臨床心理学 vol.6, No.5. p.665-671 金剛出版 2006年 9月

「夫婦問題(カップル・カウンセリング)の事例研究」(亀口憲治編)現代のエスプリ別冊『臨床行為研究セミナー』至文堂 p.198-207 2006年 9月

<辞書>

「ヘイリー, J.」, 「エリクソン, M. D.」の2項目 岡堂哲雄監修 土沼雅子編 臨床心理学入門事典 至文堂 p.203, 318 2005年10月

<座談会>

亀口憲治・狩野力八郎・中釜洋子・能智正博の共著
「座談会：臨床心理行為とは何か」(亀口憲治編)現代のエスプリ別冊『臨床行為研究セミナー』至文堂
p.9-37 2006年9月

<科研報告書>

平木典子, 飯長喜一郎, 野末武義との共著『子育ての夫婦を支援するための心理教育プログラムの開発とその効果測定』2006年3月 平成15~17年度科学研究費補助金研究成果報告書

<翻訳>

岩壁茂, 平木典子, 野末武義との共訳 レスリー・グリーンバーグ『うつに対する感情焦点化療法：エモーションフォーカスト・セラピー(EFT)の理論と実際』日本心理療法研究所 APA Psychotherapy Video Series 2005年

<コラムなど>

「患者から学ぶ：クライアントの relational world に強い関心を向けるということ」精神療法 vol.31 No.6 127-129p. 金剛出版 2005年12月

「今年の注目！私の Books & Papers 5」臨床心理学 vol.6, No.1, p.136-137 金剛出版 2006年1月

「齋藤論文へのコメント」上智大学臨床心理学研究 vol.28 p.32-34 2006年3月

誌上コンサルテーション「症状に対する意味づけが来談者間の相互作用に与える影響について」コメント 家族療法研究 vol.23. No.2. 155-156p. 2006年8月

「アメリカ夫婦・家族療法学会に参加して考えたこと」東京大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要29集 2006年5月

<学会発表>

塩谷・浜崎・中釜ほか 自主シンポジウム 「児童福祉施設における心理臨床について その3 施設での心理療法はなにか「ちがう」のか? 日本心理臨床学会第25回大会 2006年9月 関西大学

能智正博(助教授)

<論文>

「ある失語症患者における“場の意味”の変遷—語られざるストーリーを追いながら」、『質的心理学研究』, 5, 48-69, 2006年3月.

「質的研究の質と評価基準について」、『東京女子大学心理学紀要』, 1, 87-97, 2006年3月.

<著書(分担執筆)>

「質的方法」朝倉書店, 2006年6月(サトウタツヤ他編, 『心理学総合事典』, pp.64-70)

「ユーザーからみた臨床心理行為」至文堂, 2006年9月(亀口憲治編, 『現代のエスプリ別冊：臨床心理行為研究セミナー』, pp.64-72)

<書評・座談会>

「『質的研究ゼミナール』を読む」『看護研究』, 38(7), 77-81, 2005年12月.

「座談会：臨床心理行為とは何か」至文堂, 2006年9月(亀口憲治編, 『現代のエスプリ別冊：臨床心理行為研究セミナー』, pp.9-37)

<口頭発表>

「ある失語症患者における“場の意味”の変遷」(『自主シンポジウム：語れない人の語り』における話題提供)日本発達心理学会第17回大会 福岡, 2006年3月

『シンポジウム：質的研究の教育法の新展開—質的心理学の方法論(3)』(企画・司会)日本発達心理学会第17回大会 福岡, 2006年3月

『シンポジウム：生の質の探求と現象学』(企画・司会)日本質的心理学学会第3回大会 福岡, 2006年8月

「Clinical psychologist の養成と質的研究」(『シンポジウム：学生は質的心理学の教育から何を得るか』における話題提供)日本教育心理学会第48回総会 岡山, 2006年9月

教育創発学コース

秋田 喜代美(教授)

<編著書>

秋田喜代美・石井順治(編)『ことばの教育と学力』明石書店 pp.256. 2005.12

秋田喜代美(編)『授業研究と談話分析』放送大学振興会 pp.229. 2006.4

秋田喜代美・増田時枝・安見克夫(編)『領域「環境」みらい pp.166 2006.4

秋田喜代美・佐藤学(編)『新しい時代の教職論』有斐閣 pp.273. 2006.4

秋田喜代美・黒木秀子(編)『読書コミュニティのデザイン2巻 本を通して絆をつむぐ：児童期の暮らしを創る読書環境』北大路書房 pp.242 2006.8

<訳書>

スーザン・ベンサム著 秋田喜代美・中島由恵(共訳)『授業を支える心理学』新曜社 pp.241. 2006.6

<著書(分担執筆)>

「教師の力量形成：協働的な知識構築と同僚性形成の場としての授業研究」21世紀 COE プログラム東京大学大学院教育学研究科基礎学力研究開発研究センター『日本の教育と基礎学力：危機の構図と改革への展望』pp.191-208. 明石書店 2006.1

「読書を中心にした新たな学校へのヴィジョン」笹倉剛(監修)鶴川美由紀(編著)『子どもの心とことばを育む読書活動実践事例集：「図書館の中の学校」づくりをめざして』北大路書房 p.1-4. 2006.8

「解説 石井順治さんに学ぶ」石井順治著『ことばを味わい読みをひらく授業』明石書店 pp.203-209. 2006.9

< 学術論文 >

「出会いと協働探究の倫理による職能開発」『保育学研究』43(2), 169-170. 2005.12

「校内研究談話分析試論：助言者の機能に注目して—国語の授業研究事例から」『ネットワーク』8, 33-37. 2006.4

「読み書きの「文化的発達」をめぐる今後の課題」『心理学評論』49(1), 211-214. 2006.7

「教師の資質向上と園内研究：出来事から学ぶ専門家としての保育者」(社)全国幼児教育研究協会『研究紀要』55, 10-17. 2006.8

< 一般雑誌論文 >

「教育実践記録と教師の専門性」『教育』719, 45-52. 2005.10

「接続期の遊びと学び」『幼稚園じほう』33(10), 5-11. 2005.12

「少子化時代の教育に向けて」『学術の動向』11(2), 10-13. 2006.3

「対話と知識構築のある授業」『新英語教育』441, 7-9. 2006.4

「論説 遊びこむ力を育てる」『実践事例の解説』『幼稚園じほう』34(2)5-11. 24-26. 2006.5

「授業における参加と探究」『KGK journal』41(2). 2006.5

「読書生活の豊かさを願う」『月刊 国語教育研究』410, 1-2. 2006.5

「これからの若手教師に求めるもの：力量を深めるために」『教育展望』569, 46-51. 2006.9

< 学会発表 >

「描画領域における表記知識の発達過程(4)：円筒形・直方体描画における面の分化と統合方略に関する検討」日本発達心理学会第17回大会発表論文集(古池若葉・秋田喜代美)p.235. 2006.3

「多声的エスノグラフィー法から読み解く日独保育者の実践知(1)語頻度に注目した比較分析, (2)語意味カテゴリーに関する日独保育者間の比較分析」日本発達心理学会第(秋田喜代美・野口隆子・芦田宏・門田理世・鈴木正敏・箕輪潤子・小田豊)日本発達心理学会第17回大会発表論文集 pp.705-706. 2006.3

“Ethnographic video method: Examining Japanese preschool and elementary-school teachers’ discourse practice.”(Akita, K., Kadota, R., M. J. Suzuki) paper presented at 米国教育学会(AERA)in San Francisco. 55.062. 2006.4

“Contextualized approach: Analyzing Japanese preschool teachers’ discourse practices using video technology. (Suzuki, M. J., Noguchi, T., Akita, K. & Oda, Y.) paper presented at 米国教育学会(AERA)in San Francisco. 35.014. 2006.4

「学びの保障—日英の幼小移行期における実証研究をベースに—」(シンポジウム指定討論者)日本保育学会第59回大会発表論文集 S46-47. 2006.5

「日独保育者の保育観の比較検討(1)(2)」(芦田宏・鈴木正敏・門田理世・秋田喜代美)日本保育学会第59回大会発表論文集 392-395.

「多声的ビジュアルエスノグラフィーの魅力と困難」(シンポジウム「研究法としての映像：ビジュアルエスノグラフィーの可能性」話題提供者)日本質的心理学会第三回大会発表論文集, p.66-67. 2006.8

“Impacts of video editing and analysis of qualitative data in early childhood education research, ヨーロッパ乳幼児教育学会(EECERA)in Reykjavik P172. (Noguchi, T., Akita, K. & Tobin, J.) 2006.8

「ビジュアルエスノグラフィーによる教師の授業観の比較分析(1)算数授業への印象規定因, (2)授業観の質的相違の検討」(秋田喜代美・飯田都・恒吉僚子・藤村宣之・村瀬公胤)日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 518-519. 2006.9

「国語科一斉授業における談話への参加特徴と記憶との関連」(市川洋子・秋田喜代美・村瀬公胤)日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 524.

「学校心理学より少人数指導を考える」(研究委員会企画シンポジウム指定討論者)日本教育心理学会第48回総会発表論文集, S2-S3.

「事例研究に基づく教育実践へのアプローチ」(「確かな学びを創る—教育実践への3種類のアプローチから」(準備委員会企画シンポジウム話題提供者)

日本教育心理学会第48回総会発表論文集, S20-S21.

「教育心理学と教育実践を結ぶ先行学習：学習意欲・知識獲得・思考力・協同活動促進という観点から」自主シンポジウム指定討論者 日本教育心理学会第48回総会発表論文集 S42-43.

「学校現場におけるフィールドワーク研究の意義と可能性」自主シンポジウム指定討論者 日本教育心理学会第48回総会発表論文集 S56-57.

<雑誌連載>

「園長のリーダーシップ」『週刊教育プロ』35(44), 29. 2005.12

「幼児期の数学的活動をめぐる5つの神話」『週刊教育プロ』36(2), 43. 2006.1

「幼児期から児童期以後への遊びの不連続性」『週刊教育プロ』36(2), 29. 2006.2

「幼児の感覚経験を豊かにするために」『週刊教育プロ』36(10), 26. 2006.3

「園環境になじみにくい幼児への対応」『週刊教育プロ』36(14), 34. 2006.4

「計画する力」『週刊教育プロ』36(18), 55. 2006.5

「英国の就学年齢と幼小移行研究に学ぶ」『週刊教育プロ』36(22), 29. 2006.6

「幼小接続と保育の質」『週刊教育プロ』36(26), 25. 2006.7

「音を楽しむ」『週刊教育プロ』36(30), 31. 2006.8

「園長のビジョンと学びへの期待」『週刊教育プロ』36(34), 31. 2006.9

「保幼小連携の今2：私立幼稚園の連携」『Nocco』2(8), 14-16. 2005.10

「保幼小連携の今3：連携1年目の課題」『Nocco』2(9), 14-16. 2005.11

「保幼小連携の今4：子どもを真ん中においた小学校との連携」『Nocco』2(10), 14-16. 2005.12

「保幼小連携の今5：保育所の連携」『Nocco』3(1), 14-16. 2006.1

「保幼小連携の今6：連携の先にみえるものとは」『Nocco』3(1), 7-16. 2006.2

<報告書>

「幼児期から児童期への教師の発達観の比較調査研究—ビデオ再生刺激法を用いて」(平成16-18年度科学研究費補助金基盤研究(B)16330149代表 秋田喜代美)中間報告書

金森 修(教授)

<著書>

1)『遺伝子改造』単著 勁草書房, 2005年10月, pp.i-xiii, i-xv + pp.1-323.

2)『病魔という悪の物語——チフスのメアリー——』単著 筑摩書房, プリマー新書, 2006年3月, pp.1-143.

<分担執筆>

1)「場所のこころ」『環境 心理学の新しいかたち』第2章, 誠信書房, 2006年3月25日, pp.47-65.

<論文>

1)“Lingering Dawn of Homo Transgeneticus” Journal of ELSI Studies, vol.3, No.2, October 2005, pp.1-19.

2)「血液循環の認識論」『フランス哲学・思想研究』No.11, 2006年8月31日, pp.100-110.

3)「遺伝子改造の倫理と教育思想」『近代教育フォーラム』第15号, 2006年9月17日, pp.49-59.

<参考論文・エッセイなど>

1)「北京国際科学史学会に出席して」『湘南科学史懇話会通信』第13号, 2005年10月31日, pp.49-50.

2)「本は人生そのもの」『文藝春秋』特別版, 11月臨時増刊号, 2005年11月15日, pp.160-161.

3)「脳科学の最前線で」(茂木健一郎との対談)『週刊読書人』第2613号, 2005年11月18日

4)「言葉が抱える〈地理学〉」『すばる』2005年12月号, 2005年12月1日, pp.152-153.

5)「科学思想史へのオマージュ」『季刊 iichiko』No.89, Winter 2006, 2006年1月20日, pp.17-32.

6)「思想 メタ・バイオエシックス合評会」『応用倫理学研究』第3号, 応用倫理学研究会, 2006年1月25日, pp.85-132.

7)「〈世界不妊〉の詩想をめぐる断章」『生命科学・生命技術の進展に対応した理論と倫理と科学技術社会論の開発研究』平成17年度, 研究成果報告書, pp.57-61.

8)“Review of Shigehisa Kuriyama et al. Kindai nihon noshintai kankaku” Historia Scientiarum, vol.15, No.3, March 2006, pp.276-278.

9)「ビッグブラザーの、自由な末裔」『Web マガジン en』財団法人塩事業センター, 2006年4月号

10)「青春の一冊：『南回帰線』ヘンリー・ミラー」『東京大学新聞』2006年5月2日

11)「アメリカ生命倫理学に対するメタ分析的, かつ歴史的な研究」『第29回日産学術研究助成』報告書,

日産科学振興財団, 2006年5月

- 12)「遺伝的デザインの哲学」『哲学の探求』第33号, 2006年5月24日, pp.39-52.
- 13)「『死への運動』の運動性の保護のために」『anjali』No.11, June 2006, pp.8-11.
- 14)「命の裁量——“安楽死”事件を考える」(橋爪大三郎氏との対談)『公研』No.514, 2006年6月8日, pp.18-32.

<書評>

- 1)「本のカルテ: Woman 女性のからだの不思議(上・下)」『からだの科学』No.245, 2005年11月1日, p.106.
- 2)「通念ゆさぶる挑発的理論」『高知新聞』2005年12月18日他
- 3)「2005年下半期読書アンケート」『図書新聞』第2755号, 2005年12月24日
- 4)「2005年読書アンケート」『みすず』第535号, 2006年2月1日, pp.13-14.
- 5)「製薬産業が持つ問題点とは」『週刊読書人』第2627号, 2006年3月3日
- 6)「選別の思想を可視化せよ」『図書新聞』第2767号, 2006年3月25日
- 7)「19世紀科学者の想像力に感嘆」『日本経済新聞』2006年5月28日
- 8)「多彩な思想への巧みな案内書」『週刊読書人』第2646号, 2006年7月21日
- 9)「2006年上半期三冊」『週刊読書人』第2647号, 2006年7月28日
- 10)「2006年上半期読書アンケート」『図書新聞』第2784号, 2006年7月29日
- 11)「動物の進化史, 想像交えたどる」『日本経済新聞』2006年8月27日
- 12)「島蘭進『いのちの始まりの生命倫理』書評」『宗教研究』vol.80, No.349, 2006年9月30日, pp.285-289.

<学会発表・講演等>

- 1)「プロメテウスの束縛」聖心女子大学キリスト教文化研究所, 2005年10月20日
- 2)「遺伝子改造論をめぐって」東京都都立高等学校公民科『倫理・現代社会』研究会, 東京都立文京高校, 2005年11月11日
- 3)「科学論者と科学者の対話——歴史としての『サイエンス・ウォーズ』の教訓から」司会・コメント 科学技術社会論学会, 名古屋大学, 2005年11月13日

- 4)「生命と設計」日本科学哲学会, 東京大学教養学部, 2005年12月4日
- 5)「アメリカの死・臨死に関する考え方の歴史的変遷について」持続可能社会へ向けた日本の科学技術の転換の社会史的研究, 福岡ワークショップ, 2005年12月18日
- 6)「理科教育と知識社会」広島大学高等教育研究開発センター, 2006年2月23日
- 7)「フランスの医学哲学——ミルコ・グルメクを中心に——」日仏哲学会, 同志社大学, 2006年3月25日
- 8)“Fundamentality of enhancement-seeking desire for Bios” The 8th World Congress of Bioethics, Beijing, 北京国際会議中心, 2006年8月8日

岡田 猛(助教授)

<論文>

- ・山内保典・岡田猛(2006)電子掲示板における科学コミュニケーションの可能性: 発言者と発言内容に関する基礎的分析 科学技術社会論研究, 4, 101-117.

<国際学会, 国内学会, シンポジウム等発表>

- ・国際シンポジウム “Learning in museums and everyday settings” の企画開催責任者(2006年7月1日, 東大赤門総合研究棟)
- ・Okada, T. & Agata, T.(2006)How does information about creation process affect audience appreciation of artwork? Paper presented at the International symposium on Learning in museums and everyday settings. Tokyo. July, 2006.
- ・Agata, T. & Okada, T.(2006)Becoming familiar with art and artists through understanding the process. Poster presented at the International Symposium on Learning in museums and everyday settings. Tokyo. July, 2006.
- ・Yamanouchi, Y. & Okada, T.(2006)Museums as an interface between science and the public: Lessons from fraud in Japanese archeology, Poster presented at the International Symposium on Learning in museums and everyday settings. Tokyo. July, 2006.
- ・Yokochi, S., & Okada, T.(2006)Formation process of artists' long-term intention. Poster presented at the International Symposium on Learning in museums and everyday settings. Tokyo. July, 2006.
- ・Agata, T. & Okada, T.(2006)How does information

about creative process affect audience appreciation of artwork? Proceedings of the Twenty-eighth Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 949-954.

- ・ Ishibashi, K. & Okada, T. (2006) Exploring the effect of copying incomprehensible exemplars on creative drawings. Proceedings of the Twenty-eighth Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 1545-1550.
- ・ Kobayashi, F. & Okada, T. (2006) An explorative study about the strategies of serendipitous discovery. Proceedings of the Twenty-eighth Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 2535.
- ・ Yokochi, S. & Okada, T. (2006) Artists' long-term process for making art. Proceedings of the Twenty-eighth Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 2635.
- ・ 縣拓充・岡田猛(2006)アート作品の新しい展示スタイルの提案：制作プロセスに関する情報が作品鑑賞にもたらす効果 日本教育心理学会第70回大会 2006.9.
- ・ 小林文生・岡田猛(2006)セレンディピティによる科学的発見についての探索的検討 日本認知科学会第23回大会 2006.8.
- ・ 宮澤享子・岡田猛(2006)芸術創造における他者の役割：雑誌記事の分析から 日本認知心理学会第4回大会 2006.8.

生涯学習基盤経営コース

佐藤 一子(教授)

<著書>

- ①『現代社会教育学—生涯学習社会への道程』(単著) (2006.9)東洋館出版社 p.212

<論文>

- ②教育基本法改正案と社会教育『教育基本法改正問題資料集』第4集(教育学関連15学会共同公開シンポジウム準備委員会編・刊行)(2006.8)
- ③「不安定」な若者たちにとって有効な支援とはなにか『不安定を生きる若者たち—日英比較 フリーター・ニート・失業』(乾彰夫編)(2006.9)大月書店 pp.127-133
- ④教育基本法改正案と社会教育『教育基本法改正案と日本の教育—教育基本法改正問題を考える』(教育学関連15学会共同公開シンポジウム準備委員会編)(2006.9)学文社

<学会等口頭報告>

- ⑤KatsukoSato, Keynote report on the “Transition Period” for Young People in Japan and How to Support Them Towards Independence and Social Inclusion: The Advancement of Non-formal Education and Activities of NPOs and Volunteer Groupes, *Japan-EU Seminar on Youth; Enhancing young people's participation in society through non-formal education*. European Union, 23-25 November, 2005, London, British Council, (Final Report, EU Commission, 2006.6)
- ⑥生涯学習の今後と世代間交流(世代間国際交流フォーラムおよび国際研究集会 日本世代間交流協会主催)(2006.8.3, 於早稲田大学国際会議場)
- ⑦教育基本法改正案と社会教育(共同公開シンポジウム「教育基本法改正案と日本の教育—教育基本法改正問題を考える(第4回)」教育学関連15学会共催)(2006.8.26, 於立教大学)
- ⑧社会教育行政とNPOの協働と地域づくり(日本社会教育学会プロジェクト研究「NPOと社会教育」)(2006.9.8 日本社会教育学会第53回研究大会, 於福島大学)

<その他>

- ⑨「教育・学校問題」(鈴木真理と共)『現代用語の基礎知識』(2006.11)自由国民社 pp.1014-1026
- ⑩「イタリア」日本公民館学会編『公民館・コミュニティ施設ハンドブック』(2006.3)エイデル研究所 pp.410-411
- ⑪「生涯学習と社会教育」教育科学研究会編『現代教育のキーワード』(2006.5)国土社 pp.70-71
- ⑫書評『余暇・遊び・文化の権利と子どもの自由世界—子どもの権利条約第三一条論』(増山均著, 青鞥社)『教育学研究』(日本教育学会紀要)第73巻第2号(2006.6) pp.155-156
- ⑬「徳目にしばられた教育の社会化」『教育』No.726 (2006.6)国土社 p.101

根本 彰(教授)

<論文>

- 「『場所としての図書館』をめぐる議論」『カレントアウェアネス』286号 2005, p.21-25.
- 「コミュニティのための図書館：日英の比較から」『図書館雑誌』Vol.100 No.5 2006年5月号 p. 267-269.
- 「本郷キャンパスの図書館配置」『季刊文教施設』23

2006年夏号 p.50-51.

「図書館員養成と大学教育—研究と現場の関係を踏まえながら」日本図書館情報学会研究委員会編『図書館情報専門職のあり方とその養成』勉誠出版, 2006. 1-20p. (シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.6)

<資料>

「公立図書館長を対象とした図書館学教育に関するアンケート調査(1989年実施)の集計結果」(小田光宏ほか)『日本図書館情報学会誌』Vol.52, No.1, 2006. p.16-23.

「情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究」最終報告書」(上田修一)『日本図書館情報学会誌』Vol.52, No.2, 2006. p.101-128.

<書評>

「ピーター・バーク『知識の社会史』」『日本図書館情報学会誌』Vol.52, No.1, 2006. p.24-25.

<講演・シンポジウム記録>

「情報基盤としての図書館——公共図書館の将来に向けて」『全国公共図書館協議会ニューズレター』別冊 2005年11月10日 p.1-20.

“Library and information science education in Japan: some observations from the LIPER Project” Proceedings of 2006 Annual Symposium of Research Center for Knowledge Communities, University of Tsukuba, 2006. p.42-47.

「図書館情報学教育の現在と今後の展望：LIPERの研究成果をどう見るか」(三輪眞木子ほか)『日本図書館情報学会誌』Vol.52, No.1, 2006. p.39-71.

「LIPER プロジェクトの概要と今後の方向づけ」『第91回全国図書館大会記録』平成17年度 2006. p.206-7.

「LIPER プロジェクトからの提言」『日本図書館協会図書館学教育部会』75号 2006. p.8-10.

「地域資料・情報の提供サービス」『新潟県図書館協会報』No.187, 2006. p.8-9.

<報告書>

「情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究」研究班 報告書 2006年3月

文部科学省これからの図書館の在り方検討協力者会議『これからの図書館像——地域を支える情報拠点をめざして(報告)』平成18年3月. 94p.

科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会

学術情報基盤作業部会『学術情報基盤の今後の在り方について(報告)』平成18年3月23日 100p.

<監修>

「情報学」『シゲマツ先生の学問のすすめ 興味・関心ではじめる学問図鑑60』2世の中を知りたい社会科学 岩崎書店 2006 p.56-59.

影浦 峽(助教授)

<論文>

Tsuji, K. and Kageura, K. (2006) “Automatic generation of Japanese-English bilingual thesauri based on bilingual corpora,” *Journal of the American Society for Information Science and Technology*, 57(7), p. 891-906.

Lee, K-S. and Kageura, K. (2006) “Korean-Japanese story link detection based on distributional and contrastive properties of event terms,” *Information Processing and Management*, 42(2), p.538-550.

<著書>

影浦峽(2006)『子どもと話す 言葉ってなに?』東京, 現代企画室.

Kageura, K. (2005) “Character system, orthography and types of origin in Japanese writing,” *Quantitative Linguistics: An International Handbook*, Berlin: Walter de Gruyter. p.935-946.(分担執筆)

<招待講演>

影浦峽(2006)「専門用語・熟語・慣用句のつくりとバリエーション」第1回臨床医学オントロジーシンポジウム—用語と概念, 自然言語処理, そしてオントロジー構築へ—」東京大学鉄門講堂, 2006年7月28日.

<学会発表:査読付き>

Kageura, K. and Toyoshima, M. (2006) “Analysis of idiom variations in English for the enhanced automatic look-up of idiom entries in dictionaries,” *Euralex 2006: Proceedings of the 12th Euralex International Congress*, Turin, Italy, 6-9 September 2006. p.989-995.

Bey, Y., Boitet, C. and Kageura, K. (2006) “TRANSBey prototype: An online collaborative Wiki-based CAT environment for volunteer translators,” *Proceedings of the Third International Workshop on Language Resources for Translation Work, Research & Training*, Genoa, Italy, 28 May, 2006. p.21-29.

Kageura, K. and Kikui, G. (2006) "A self-referring quantitative evaluation of the ATR basic travel expression corpus BTEC," *LREC'06: Proceedings of the 5th International Conference on Language Resources and Evaluation*, Genoa, Italy, 22-28 May, 2006. p.51-454.

Boitet, C., Bey, Y. and Kageura, K. (2005) "Main research issues in building web services for mutualized, non-commercial translation," *SNLP: 6th Symposium on Natural Language Processing*, Chiang Rai, Thailand, 13-15 December, 2005.

Bey, Y., Kageura, K. and Boitet, C. (2005) "A framework for data management for the online volunteer translators' aid system QRLex," *PACLIC 2006: Proceedings of the 19th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*. Taipei, Taiwan, 1-3 December, 2005. p.51-60.

<学会発表：査読無し>

鈴木崇史・影浦峽(2006) "Several lexical indices of Japanese prime ministers' two kinds of addresses at the Diet—comparing the diversity of contents," 第50回計量国語学会大会, 2006年9月30日, 国立国語研究所.

影浦峽(2006)「翻訳という行為と翻訳支援」語彙資源の深化とNLP新時代科研・合同シンポジウム, 2006年9月14日, 名古屋大学.

辻慶太, 芳鐘冬樹, 影浦峽(2006)「司書資格の取得がもたらす効果：社会人及び大学新生に対するネットアンケート調査」2006年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱. 2006年5月27日 大東文化大学, p.59-62.

影浦峽(2006)「人間の翻訳におけるコーパスの位置づけ」言語処理学会第12回年次大会発表論文集. 2006年3月14-16日 慶應義塾大学日吉キャンパス, p.452-455.

品川哲也, 森辰則, 影浦峽(2006)「オンライン対訳文書からのテキスト領域抽出とアラインメント」言語処理学会第12回年次大会発表論文集. 2006年3月14-16日 慶應義塾大学日吉キャンパス, p.520-523.

影浦峽, 佐藤理史, 竹内孔一, 宇津呂武仁, 辻慶太, 小山照夫(2006)「翻訳者支援のための言語レファレンス・ツール高度化方針」言語処理学会第12回年次大会発表論文集. 2006年3月14-16日 慶應義塾大学日吉キャンパス, p.707-710.

金平昂, 平尾一樹, 竹内孔一, 影浦峽(2006)「イディオムの異形規則を利用したイディオム検索システムの構築」言語処理学会第12回年次大会発表論文集. 2006年3月14-16日 慶應義塾大学日吉キャンパス, p.711-714.

金平昂, 豊島実和, 竹内孔一, 影浦峽(2006)「英語イディオムの異形を整理する」言語処理学会第12回年次大会発表論文集. 2006年3月14-16日 慶應義塾大学日吉キャンパス, p.1019-1022.

Kageura, K. (2006) "Requirements for language reference tools by online volunteer translators," *Workshop on the Potential of the Internet-Dictionary WaDokuJiten as Basic Element for a Language Portal Site on Japanese and German*, Tokyo, Japan, 6-8 March, 2006.

<その他>

影浦峽(2005)「情報と言語」三田図書館・情報学会編『図書館・情報学研究入門』東京：勁草書房, p.9-12.

鈴木眞理(助教授)

<共編著書>

『社会教育の基礎』学文社, 2006年8月

<論文>

「北海道せたな町立太櫓小学校〈海浜留学制度〉」財団法人育てる会『全国の山村留学実態調査報告書』2006年3月, p.38-40.

「大学エクステンションと地域社会との連携」大学公開講座研究会『最近の大学エクステンションの方向性』2005年11月, p.12-18.

<その他>

『鼎談・地域社会の創造・再生をめざす公民館の運営—教育機関としての豊かな地域社会を育むために』神奈川県教育委員会, 2005年12月, p.11-47.

三浦太郎(助手)

<紀要論文>

「占領下日本におけるCIE第2代図書館担当官バーネットの活動」『東京大学大学院教育学研究科紀要』vol.45, 2006.3, pp.267-277.

<翻訳>

ペーター・ヴォドセク「改革と理念：ドレスデン—プラウエンおよびライプツィヒにおけるヴァルター・ホフマンの図書館業績」『京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究』No.5, 2006.3, pp.139-154.

<学会・研究会発表>

「バーネットと戦後占領期日本の図書館」2005年度日本図書館文化史研究会第3回研究例会, 2006.2.25, 明治大学.

“Japanese Library Reform under the Allied Occupation Period, 1945-1952” Poster Session, World Library and Information Congress: 72nd IFLA General Conference and Council, 2006.8. 22-23, 韓国ソウル COEX Convention and Exhibition Center.

<その他>

「日本の戦後図書館史：戦後占領期を中心に」『図書館・情報学研究入門』三田図書館・情報学会編, 勁草書房, 2005.10, pp.138-141.

「新刊紹介 ヴァンスリック『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』」『図書館界』vol.58, No.2, 2006.7, p.123.

身体教育学コース

衛藤 隆(教授)

<著書・分担執筆>

「総論」『児童生徒の身体発育と疾病異常等の現状』「感染症」財団法人日本学校保健会編『学校保健の動向(平成17年度版)』財団法人日本学校保健会, pp.29-30, 30-34, 34-37, 2005

「6. 保健(小児保健と行政・福祉, 死亡統計 年齢別死因, 乳幼児健康診査, 学校保健)」白木和夫, 高田 哲編『ナースとコメディカルのための小児科学』初版, 日本小児医事出版社, pp.55-64, 2006

「母子感染」『肝炎ウイルス以外のウイルス性肝障害』「子どもの脂肪肝／肥満児」『コラム—肥満とジャンクフード』「母乳／母子感染」松崎靖司, 宜保行雄編『患者さんの質問に答える 慢性肝疾患診療』1版, 南山堂, pp.101-102, 166-168, 169-172, 172, 173-174, 2006

「学校医の仕事の流れ」『学校保健とは』「その他—健康診断票に記載された項目以外」『学校医に必要な情報源』「学校生活管理指導表」衛藤 隆, 中原俊隆編『学校医・学校保健ハンドブッカー—必要な知識と視点のすべて—』第1版, 文光堂, pp.1-3. 6-9, 312-315, 523-525, 526-527, 2006

「就学時の健康診断」大関武彦, 古川 漸, 横田俊一郎編集『今日の小児治療指針』第14版, 医学書院, pp.572-573, 2006

「身体の発育・発達」『地球環境の変化と身体健康』武藤芳照, 衛藤 隆, 山本義春編『新訂 現代身体教育論』, 放送大学教育振興会, pp.11-22, pp.167-177, 2006

『最新 Q&A 教師のための救急百科』衛藤 隆, 田中哲郎, 横田俊一郎, 渡辺 博編, 大修館, 2006

<論文>

Ishizaki, Y. Kobayashi, Y. Yamagata, Z. Eto, T. Hoshika, A. Kano, Y. Koeda, T. Miike, T. Oki, J. Tanaka, H. and Watanabe, H: Research on promotion of management of children with psychosomatic and psychosocial disorders in Japan. *Pediatrics International*, 47: 352-357, 2005.

「母子健康手帳の上手な使い方」『小児科』46(11): 1862-1866, 2005

「学校医とは何か」『JIM』15(11): 876-879, 2005

「保健におけるミニマムとは何か」『体育科教育』54(2): 18-21, 2006

「子育て支援の観点からみた健診」鈴木美枝子と共著『チャイルドヘルス』9(3): 207-212, 2006

<学会講演>

「これからの時代の学校保健と小児科医」第30回東日本小児科学会, 静岡市, 2005年11月27日

「健康で安全な環境づくりをめざして」第15回日本健康教育学会学会長講演, 東京都, 2006年6月23日

<その他の講演>

「日本の学校保健の現状と課題」国立台湾師範大学衛生教育系講演会, 国立台湾師範大学, 2005年10月20日

「日本の学校保健」『健康教育の動向』国立台北教育大学講演会, 国立台北教育大学, 2005年10月21日

「生涯にわたり健康の保持増進をめざす疾病予防と保健管理の進め方—保健管理に活かすヘルスプロモーションの考え方—」第55回全国学校保健研究大会課題別協議会, 第6課題講義, 大津市, 2005年11月11日

「学校における健康づくりの考え方—学校・家庭・地域の連携によるヘルスプロモーション—」第69回全国学校歯科保健研究大会, 岡山市, 2005年11月17日

「これからの学校保健と医師のかかわり」日本ベリッガーインゲルハイム多摩地区講演会(特別講演2)吉祥寺第一ホテル, 2006年3月22日

「子育て支援と健康・安全に関わる教育」順天堂大学合同ゼミナール講演, 順天堂大学, 2006年4月18日

- 日
 「これからの健康教育が目指すべきもの—学校・家庭・地域の連携によるヘルスプロモーション—」
 日本学校薬剤師会平成18年度健康・学校環境衛生講習会，秋田県総合保健センター，2006年7月9日
- 「学校医および学校保健に関する最近の話題」第5回
 志太地区・焼津小児科医会学術講演会講演，焼津グランドホテル，2006年7月21日
- 「小児科医からみた学校保健」2006年度専修大学心理教育相談室公開研修会(第2回)専修大学生田校舎，2006年7月29日
- 「子どもの心と教育一人が育つ上で大切なこと—」第26回小諸市民大学(第2回)小諸市民会館，2006年8月4日
- 「安心・安全って何でしょう？—セーフティについて—」平成18年度PTA文化講演会講演，東京大学教育学部附属中等教育学校，2006年9月9日
- 「日本の学校保健と健康教育の現状(Current School Health and Health Education in Japan)」中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市人民病院，2006年9月20日
- <その他>
- (書籍編集)『今日の小児治療指針』第14版，大関武彦，古川 漸，横田俊一郎編集：市川光太郎，衛藤隆，他，責任編集，医学書院，2006
- (取材協力)「子どもの心とからだの健康 懸念される基本的な生活を支える力」レポート(中 由里)，教育家庭新聞，第1838号，2005年10月15日
- (テレビ取材)NHK ニュース「子どものアレルギーで調査へ」，2005年12月9日
- (巻頭言)「ヘルスプロモーションのこれから」日本健康教育学会誌，13(2)：59，2005
- (ラジオ局電話取材)FM NORTHWAVE「モーニングスコープ」グローバルスコープ「夜更かし，朝寝坊の子供たち」取材日2006年3月14日
- (巻頭言)「美しい日本の春から食育を考える」栄養日本，49(4)：257，2006
- (質問と答)「定期的健康診断は法律上どのように決められているのでしょうか？診察すべき内容についても教えてください」小児内科，38(3)：570-571，2006
- (PTA 広報)「学校長挨拶」東大附属 PTA 広報「ぎんなん」No.95，2006年7月20日
- (取材協力)「子供のいる時吸わないで 屋外でも禁

煙求めロゴマーク作製」小児科学会など3学会，
 日本経済新聞，2006年8月15日

武藤 芳 照(教授)

<編著書>

- 『新訂現代身体教育論』(衛藤隆，山本義春と共編)，
 放送教育振興会，東京2006.3
- 『スポーツ障害』424-429，(分担執筆)，学校医・学校保健ハンドブック，文光堂，東京2006.3
- 『高齢者の転倒・骨折の要因とその予防』35-47，(分担執筆)老年医学 Update2006-2007，メジカルビュー社，東京2006.6
- 『変形性膝関節症の運動・生活ガイド』(第3版)(黒澤尚，伊藤晴夫と共編)，日本医事新報社，東京2005.11

<論文>

- 「学校スポーツによる児童・生徒の体力向上と健康増進」(太田美穂らと共著)，日本臨床整形外科医学会；日本臨床整形医学会誌 vol.30 No.3；52-57，2005
- 「Comprehensive Health Education Combining Hot Spa Bathing and Lifestyle Education in Middle-aged and Elderly Women: One-year Follow-up on Randomized Controlled Trial of Three-and Six-month Intervention」(Hiroharu Kamioka, Yoshikazu Nakamura, Toshiki Yazaki, Kazuo Uebaba, Yoshiteru Mutoh, Shinpei Okada, Mie Takahashi)，vol.16, No.1, 35-44, 2006
- 「転倒予防教室の設立と実践」(太田美穂らと共著)，骨・関節・靭帯 vol.19, No.1, pp.17-25, 2006
- 「転倒予防医学研究会第2回研究集会開催にあたって」，Osteoporosis Japan vol.14 No.1；pp.70, 2006
- 「転倒予防教室—システムと介入効果およびリスク管理—」(太田美穂らと共著)，老年医学 Vol.44, No.2；pp.171-179, 2006
- 「Report on the Japanese Orthopaedic Association's 3year project observing hip fractures at fixed-point hospitals」(Keizo Sakamoto, Toshitaka Nakamura, Hiroshi Hagino, Naoto Endo, Satoshi Mori, Yoshiteru Muto, Atsushi Harada, Tetsuo Nakano, Seizo Yamamoto, Kazuhito Kushida, Katsuro Tomita, Mitsuo Yoshimura, Hiroshi Yamamoto)，Journal of ORTHOPAEDIC SCIENCE vol.11. No.2；pp.127-134, 2006
- 「転倒の予防法」(太田美穂らと共著)，産婦人科治療

Vol.92 No.4-2006/4 p.405-409

「IV. 転ばない, ケガしないために転倒予防教室の目指すもの」(太田美穂らと共著), Monthly Book medical Rehabilitation No.65

「温泉治療と健康増進の効果に関する無作為比較試験のシステマティック・レビュー」(上岡洋晴らと共著), 有限責任中間法人日本温泉気候物理医学会雑誌 p155-166, 2006.5

「生活習慣病予防のための理学療法の医療機関における実践とその成果」(小松泰喜と共著), 理学療法 vol.23 No.5

「運動器リハビリテーションの効果 転倒予防への取り組み」(小松泰喜らと共著), 臨床整形外科 Vol.41 No.7 p.765-771

「Clinical Factors as predictors of the risk of falls and subsequent bone fractures due to osteoporosis in postmenopausal women」(Taiki Komatsu, Kang Jung Kim, Tesuo Kaminai, Hidoharu Okuizumi, Hiroharu Kamioka, Shinpei Okada, Hyuntae Park, Ayumi Hasegawa, Yoshiteru Mutoh, Iwao Yamamoto), J Bone Miner Metab(2006)24: 419-424

「中高年者の水泳による上肢障害」(石川知志らと共著), JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION Vol.15 No.7 2006

<解説・レポート>

スポーツドクターレポート「第8回水と健康医学研究会の報告」(金岡恒治らと共著), 臨床スポーツ医学 vol.22, No.10, 1304-1308, 2005

スポーツドクターレポート「第5回大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナー」(石川知志らと共著), 臨床スポーツ医学 vol.23, No.1: 96-102

第11回世界水泳選手権(カナダ・モントリオール)帯同医事報告(渡部厚一らと共著), 臨床スポーツ医学 Vol.23, No.3: pp.316-322, 2006

「体のための常識・非常識—目は心の窓—」, 少林寺拳法会報2006年11月, p.35

<学会発表>

「地域における健康・スポーツの実践研究」(岡田真平, 高橋亮輔, 上岡洋晴, 武藤芳照), 日本体育学会第56回大会, 2005年11月, つくば市

「若年野球選手の上肢・下肢関節可動域について—障害予防の観点から—」(高橋亮輔, 武藤芳照, 上岡洋晴, 岡田真平), 日本体育学会第56回大会, 2005年11月, つくば市

「運動器リハビリテーションとバイオメカニクス」

(武藤芳照, 太田美穂, 福島直, 林英俊), 第18回日本運動器リハビリテーション学会, 2006年7月, 岡山市

<学術講演等>

「運動と年齢—整形外科系」, 第18回(平成17年度)日本医師会健康スポーツ医学講習会, 2005年10月, 東京都

「スポーツ・健康医学と介護予防の実践・教育—「運動器の10年」運動の推進を図りつつ—」, 第6回リハビリテーション研究会 in Yonago, 2006年12月, 米子市

「運動器と運動を大切に—児童・生徒のためのスポーツ障害・生活習慣病予防のための適正な運動・スポーツのあり方—」, 第1回学校医研修会, 2005年12月, 明石市

「運動器と運動を大切に—児童・生徒のスポーツ障害・生活習慣病予防のための適正な運動・スポーツのあり方—」, 平成17年度浜田市医師会学校医部会研修会, 2006年2月, 浜田市

「整形外科スポーツ医学の実践と教育—学校保健から介護まで—」, 日本整形外科学会学術総会「三四郎セミナー7」, 2006年5月 神奈川県

「スポーツ・健康医学の実践と教育—「運動器10年」運動の推進をめざして」, 高知骨粗鬆症学術講演会, 2006年9月, 高知県

山本義春(教授)

<論文>

Safonov, L. A. and Y. Yamamoto. Noise-driven switching between limit cycles and adaptability in a small-dimensional excitable network with balanced coupling. *Physical Review E* 73: 031914-1-11, 2006.

Kiyono, K., Z. R. Struzik, and Y. Yamamoto. Criticality and phase transition in stock-price fluctuations. *Physical Review Letters* 96: 068701-1-4, 2006.

Togo, F., K. Kiyono, Z. R. Struzik, and Y. Yamamoto. Unique very low-frequency heart rate variability during deep sleep in humans. *IEEE Transaction on Biomedical Engineering* 53: 28-34, 2006.

Kiyono, K., Z. R. Struzik, N. Aoyagi, and Y. Yamamoto. Multiscale probability density function analysis: Non-Gaussian and scale-invariant

- fluctuations of healthy human heart rate. *IEEE Transaction on Biomedical Engineering* 53:95-102, 2006.
- Struzik, Z. R., J. Hayano, R. Soma, S. Kwak, and Y. Yamamoto. Aging of complex heart rate dynamics. *IEEE Transaction on Biomedical Engineering* 53:89-94, 2006.
- Cerutti, S., A. L. Goldberger, and Y. Yamamoto. Recent advances in heart rate variability signal processing and interpretation. *IEEE Transaction on Biomedical Engineering* 53:1-3, 2006.
- Kotani, K., Z. R. Struzik, K. Takamasu, H. E. Stanley, and Y. Yamamoto. Model for complex heart rate dynamics in health and diseases. *Physical Review E* 72:041904-1-8, 2005.
- Safonov, L. A., and Y. Yamamoto. Noise-driven switching between limit cycles and adaptability in a small-dimensional excitable network with balanced coupling. In: *Unsolved Problems of Noise and Fluctuations*, Reggiani, L., C. Pennetta, V. Akimov, E. Alfinito, and M. Rosini, editors. American Institute of Physics, pp.415-420, 2005.
- Yamamoto, Y., R. Soma, Z. R. Struzik, and S. Kwak. Can electrical vestibular noise be used for the treatment of brain diseases? In: *Unsolved Problems of Noise and Fluctuations*, Reggiani, L., C. Pennetta, V. Akimov, E. Alfinito, and M. Rosini, editors. American Institute of Physics, pp.279-286, 2005.
- 山本義春. 身体の調節と健康. 現代身体教育論. 武藤芳照, 衛藤 隆, 山本義春編. 放送大学教育振興会, 東京, 2006, pp.36-47.
- 清野 健, Zbigniew R. Struzik, 山本義春. ヒトの心拍変動に見られる相転移現象. 日本物理学会誌 61:268-272, 2006.
- 相馬りか, 山本義春, 郭 伸. 経皮の前庭電気ノイズ刺激は有効か?—パーキンソン病, 多系統萎縮症に対する検討例の報告—. 難病と在宅ケア 12(1):49-53, 2006.
- 清野 健, 山本義春. 心拍ゆらぎと健康. 科学75:1417-1421, 2005.
- 大橋恭子, 山本義春. 慢性疲労の身体活動パターンを探る. 労働の科学 60:740-743, 2005.
- 青柳直子, 山本義春. 心拍変動長周期ゆらぎの機序. 時間生物学 11(2):2-8, 2005.
- <招待講演・シンポジウム講演>
- Yamamoto, Y. Noise and fluctuations in human cardiovascular physiology. *Seminar at the Academia Sinica, Physics Division*. Taipei, Taiwan (March, 2006).
- Yamamoto, Y. Boosting human brain with stochastic resonance. *Seminar at the National Center for Theoretical Sciences, Physics Division*. Hsinchu, Taiwan (March, 2006).
- Yamamoto, Y. Functional stochastic resonance for central neurodegenerative disorders. *Hokkaido University COE Workshop on Complex Dynamics of Networks of Oscillators: From Basic Research to Novel Therapy*. Sapporo, Japan (November, 2005).
- 山本義春. 心拍ゆらぎと健康. 東工大経済物理セミナー, 東京, 2006年6月.
- 山本義春. モバイル・ナース構想の現状と課題. 国際システム健康科学学会設立記念シンポジウム, 東京, 2006年5月.
- 多 賀 巖太郎(助教授)
- <論文>
- F. Homae, H. Watanabe, T. Nakano, K. Asakawa, G. Taga: The right hemisphere of sleeping infant perceives sentential prosody. *Neuroscience Research* 54, 276-280, 2006
- H. Watanabe, G. Taga: General to specific development of movement patterns and memory for contingency between actions and events in young infants. *Infant Behavior and Development* 29, 402-422, 2006
- 渡辺はま, 多賀巖太郎: 乳児の身体運動から見る神経機能および認知機能の発達, 人間環境学研究, 4, 45-60, 2006
- <本>
- G. Taga: Nonlinear dynamics of human locomotion: from real-time adaptation to development. In H. Kimura, K. Tsuchiya, A. Ishiguro and H. Witte Eds. *Adaptive Motion of Animals and Machines*. Springer-Verlag, Tokyo, 189-204, 2006
- 多賀巖太郎: 乳児における発達脳科学研究, 「脳を知る・創る・守る・育む 8」(脳の世紀推進会議編)クバプロ, 115-140, 2006
- 多賀巖太郎: 脳と身体の発達, 23-35, ロボットと身体, 178-189(武藤芳照, 衛藤隆, 山本義春 編)「現代身体教育論」放送大学教育振興会, 2006

<総説>

多賀巖太郎：運動覚の発達，子どもと発育発達 4：39-44，2006

多賀巖太郎：小児の行動と脳の発達に関する基礎研究の現状，小児看護，29：1163-1166，2006

<学会発表・講演>

H. Watanabe, G. Taga, F. Homae: Cortical activation in prefrontal and occipital areas in 3-month-olds. ESF Research Conference on Brain Development and Cognition in Human Infants, Acquafredda di Maratea, Italy, Oct. 2005

G. Taga: Functional brain development in early infancy. The 3rd RECBS-Hokudai symposium, Sapporo. Dec. 6, 2005(invited)

G. Taga: Early development of infant brain. JSPS Japanese-American Frontiers of Science Symposium, Kanagawa, Dec. 10, 2005(invited)

F. Homae, H. Watanabe, T. Nakano, K. Asakawa, G. Taga: Functional Connectivity During Auditory Processing in the Young Infant Brain: An Optical Topography Study. Annual Cognitive Neuroscience Society Meeting, San Francisco, USA, Apr. 2006

G. Taga: Dynamical complexity of spontaneous movements in young infants. International Conference on Infant Studies, Kyoto, Japan, June 21, 2006

G. Taga, K. Asakawa, H. Watanabe, F. Homae: Sleep-wake differences in visual and auditory activation of the brain in the first year of life. International Conference on Infant Studies, Kyoto, Japan, June 21, 2006

F. Homae, H. Watanabe, T. Nakano, G. Taga: Prosodic development in the infant brain. International Conference on Infant Studies, Kyoto, Japan, June 21, 2006

H. Watanabe, G. Taga, F. Homae, T. Nakano: Functional imaging of the occipital and prefrontal cortex of 3-month-olds during visual perception. International Conference on Infant Studies, Kyoto, Japan, June 21, 2006

T. Nakano, H. Watanabe, F. Homae, K. Asakawa, G. Taga: Brain imaging of habituation and dishabituation in young infants. International Conference on Infant Studies, Kyoto, Japan, June 21, 2006

H. Watanabe, G. Taga: Stability and flexibility of

motor learning and memory in young infants during a mobile task. International Conference on Infant Studies, Kyoto, Japan, June 22, 2006

多賀巖太郎：赤ちゃんの脳を探る，JST/CREST「脳の機能発達と学習メカニズムの解明」第1回公開シンポジウム，東京，2005.11.19

多賀巖太郎：脳と身体の初期発達，行動発達研究会第4回研修会，東京，2005.11.26(招待)

多賀巖太郎：乳児における学習と脳，国際高等研究所，学習の生物学第9回研究会，京都，2005.12.27(招待)

多賀巖太郎：脳科学と教育研究の現状，埼玉県国公立幼稚園主任教諭等研究協議会，浦和，2006.2.7(招待)

中野珠実，渡辺はま，保前文高，浅川佳代，多賀巖太郎：馴化・脱馴化における乳児の前頭葉の活動，第8回日本ヒト脳機能マッピング学会大会，岡崎，2006.3.12

多賀巖太郎：脳と身体の発達のダイナミクス，立教大学 RARC 心理プロジェクト公開シンポジウム，新座，2006.3.31(招待)

多賀巖太郎：初期発達のダイナミクス，インテリジェンスダイナミクス2006，品川，2006.4.7(招待)

野崎大地(助教授)

<論文>

Nozaki D., Kurtzer I., Scott SH. Limited transfer of learning between unimanual and bimanual skills within the same limb. *Nature Neuroscience* (in press)

Takarada Y., Nozaki D., Taira M. Force overestimation during tourniquet-induced transient occlusion of the brachial artery and possible underlying neural mechanisms. *Neuroscience Research* 54:38-42, 2006

Nozaki D., Nakazawa K., Akai M. Uncertainty of knee joint muscle activity during knee joint torque exertion: the significance of controlling adjacent joint torque. *Journal of Applied Physiology* 99:1093-1103, 2005

<学会抄録>

Nozaki D., Kurtzer I., Scott SH. To learn with one limb or two: Limited transfer between unimanual and bimanual skills. *Neuroscience Research* 55: S124, 2006

野崎大地. 腕を動かす脳内過程：片手運動と両手運

動の違い. 第6回計測自動制御学会制御部門大会
論文集461-462, 2006

<学会発表>

Nozaki D., Kurtzer I., Scott SH. To learn with a limb or two? Limited transfer of learning between unimanual and bimanual skills. The 29th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, Kyoto, Japan, 2006.7. 18-21

Nozaki D., Kurtzer I., Scott SH. To learn with a limb or two? Limited transfer of learning between unimanual and bimanual skills. The 16th Annual Meeting of the Neural Control of Movement Society, Key Biscayne, USA. 2006.5. 3-6

Nozaki D., Scott SH. Interlimb coordination of posture and movement: postural adaptations to mechanical loads related to motion of the contralateral arm. The 35th Annual Meeting of Society for Neuroscience, Washington, USA, 2005.11. 10-16

野崎大地. 腕を動かす脳内過程: 片手運動と両手運動の違い. 第6回計測自動制御学会制御部門大会. オーガナイズドセッション生物制御II, 名古屋, 2006.6.10

<招待講演等>

野崎大地. 腕を動かす脳内過程: 片手運動と両手運動の違い. ATR 脳情報研究所, 京都, 2006.8.10

野崎大地. 腕を動かす脳内過程: 片手運動と両手運動の違い. 第4回計測自動制御学会生物制御調査研究会, 東京, 2006.5.20

野崎大地. 腕を動かす脳内過程: 片手運動と両手運動の違い. 順天堂大学医学部, 東京, 2006.3.9

山中 健太郎(助手)

<学会発表>

Yamanaka K. Yamamoto Y. Inter-trial phase-locked and amplitude-enhanced EEG responses during Go/NoGo task. Society for Neuroscience 35th Annual Meeting, November 12-16, 2005, Washington DC, USA

飯塚太郎 山中健太郎 ストループ課題のパフォーマンスと前頭シータ波の変動との関係について. 第56回日本体育学会, 2005.11-23-26, 筑波大学, つくば市(茨城県)

Kitajo K. Yamanaka K. Nozaki D. Ward LM. Yamamoto Y. Behavioral stochastic resonance associated with noise-enhanced large-scale

synchronization of human brain activity. Japan-Germany Symposium on Computational Neuroscience, February 1-4, 2006, Wako, Japan

Kitajo K. Yamanaka K. Nozaki D. Ward LM. Yamamoto Y. Noise-improved visual perception is associated with frequency-specific large-scale synchronization of human brain activity. 12th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, June 11-15, 2006, Florence, Italy

相馬(宮崎)りか(助手)

<論文>

Struzik, Z. R., J. Hayano, R. Soma, S. Kwak, and Y. Yamamoto. Aging of complex heart rate dynamics. IEEE Transaction on Biomedical Engineering 53: 89-94, 2006.

<解説>

相馬りか, 山本義春, 郭伸: 経皮的前庭電気ノイズ刺激は有効か?—パーキンソン病, 多系統萎縮症に対する検討例の報告—. 難病と在宅ケア. 12(1): 49-53, 2006.

<学会発表>

相馬りか, 斉藤顕治, 山本義春: 経皮的前庭電気刺激による頸動脈圧反射の修飾. 第27回循環制御医学会総会, 東京, 5.19, 2006.

大学経営・政策コース

金子 元久(教授)

<編著・共著>

金子元久編著『中国における高等教育改革の動向』, 東京大学大学総合教育研究センター, 2006年3月. 147ページ.

<論文>

「高等教育における市場化—国際比較からみた日本」, 『比較教育学研究』32(2006年1月).

「高等教育市場化—通国際比較来看日本」, 『教育与経済』83(2006年第1期), pp.1-8.

「高等教育市場化: 趨勢, 問題与前景」, 『清華大学教育研究』91(2006年第3期), pp.9-18.

「社会的危機和基礎学力」, 『全球教育展望』229(2006年代3期), pp.11-15.

「日本の高等教育—改革の現状と伝統の影響」, P. H.アルトバック, 馬越徹編, 北村友人監訳『アジアの高等教育改革』, 玉川大学出版部. 2006年. pp.126-155.

「日本の教育と基礎学力」, 東京大学基礎学力開発センター編, 『日本の教育と基礎学力』2006年, 明石書店, pp.9-34.

「教育経済学的20年」, 『新華文摘』16(2005年), pp.145-148.

「引き裂かれる学校」, 『教育展望』, 52巻11号(2006年12月), pp.48-53.

「社会や政治に引き裂かれる学校」, 『日本教育新聞』(2006年10月2日), p.3.

「日本型私立大学の転換点」, 『IDE—現代の高等教育』481(2006年6月).

「人文社会系大学院の展望」, 『IDE—現代の高等教育』478(2006年2-3月).

「中国の高等教育—市場指向の急拡大」, 『IDE—現代の高等教育』478(2006年2-3月).

「高等教育の次の焦点—奨学金と授業料」, 『IDE—現代の高等教育』474(2005年10月), pp.5-11.

<報告書>

瀧澤博三, 佐々木正峰, 金子元久「中教答申『我が国の高等教育の将来像について』—これからの高等教育政策の課題は何か」私学高等教育研究所 2006.8

<国際会議発表論文>

「高等教育大衆化の政治経済学—日中比較」中国教育経済学会(2006年9月 青島)

「東アジア型高等教育における財政の課題」, 日中高等教育財政会議 北京大学, 2006年9月17・18日
 “Incorporation of National Universities in Japan,” *International Conference on Higher Education and Changes: Reflections on International Trends and Taiwan Experience.* (11 November 2005 National Chung Cheng University.

教職開発学コース

佐藤 学(教授)

<著書・単著>

『学校の挑戦—学びの共同体の創造』小学館 2006年5月 300p.

<著書・共編著>

『新しい時代の教職入門』(秋田喜代美・佐藤学編 有斐閣 2006年4月)

<著書・分担執筆>

Toward Dialogic Practice through Mediated Activity: Theoretical Foundation for Constructing Learning Community, Katsuhiko Yamazumi, Yrjo Engestrom

and Harry Daniels eds., *New Learning Challenges: Going beyond the Industrial Age System of School and Work*, Kansai University Press. 2006. pp.103-134.

「フィンランドの教育の優秀性とその背景—PISA 調査の結果が示唆するもの」(教育科学研究会編『なぜフィンランドの子どもたちは『学力』が高いか』国土社 2005年10月 pp.34-43.)

「教育の理想—多様性と共生」(宮寺晃夫との対談 諏訪春雄責任編集『今, 教育の原点を問う』(勉誠出版 2005年11月 pp.2-22.)

「『経済大国』と崩壊する社会」(佐藤学+島本滋子+的場昭弘+間宮陽介, 『世界』編集部編『戦後60年を問い直す』岩波書店 2005年12月 pp.113-164.)

「転換期の教育危機と学力問題—学力論議と学校の変容」(東京大学大学院教育学研究科基礎学力研究開発センター『日本の教育と基礎学力』明石書店 2006年2月 pp.35-50.)

「幼小の学びの連続性から幼児教育の将来像を探る」(全国幼児教育研究協会編『学びと発達の連続性—幼小接続の課題と展望』(チャイルド社 2006年5月 pp.34-44.)

「わが国の学協会の取り組みに関する調査結果の分析」(学術会議叢書13『科学のミスコンダクト』日本学術協力財団 2006年9月, pp.45-64.)

<学術論文>

「転換期的学校改革—学習共同体の構想」(『全球教育展望』2006年第5期 中華人民共和国教育部主管 pp.3-8.)

「『義務教育』概念の歴史的位相—改革のレトリックを問い直す」(日本教育学会『教育学研究』第72巻4号 2005年12月 pp.14-25.)

「学協会における倫理綱領の制定状況」(日本学術会議『学術の動向』2006年1月号 pp.86-90.)

「全球化時代の日本学校教育改革—危機と改革の構想」(中国語翻訳 田輝 中央教育科学研究所編『教育研究』中央教育科学研究所 北京 中華人民共和国 2006年1月 pp.49-53.)

「専門家の見識を育てる教師教育カリキュラムの認識論的基礎」(教育哲学会『教育哲学研究』第93号 2006年5月 pp.1-6.)

「教師教育の危機と改革の原理的検討—グランドデザインの前提」(日本教師教育学会『岐路に立つ戦後教員養成: 教師教育学会年報第15号』2006年9月 pp.8-17.)

<雑誌論文・その他>

- 「専門家教育における理論と実践の統合」(『Japan Medical Society』2005年10月 pp.10-11.)
- 「学校の挑戦「学びの共同体」づくり(16)」(『総合教育技術』小学館 2005年10月 pp..)
- 「同僚性による教師の連帯と成長—学びの専門家として」(『教育と医学』慶應義塾大学出版会 2005年10月 pp.12-19.)
- 「学校の挑戦「学びの共同体」づくり(17)学びを中心とする学校改革の始まり—富山市立奥田小学校」(『総合教育技術』小学館 2005年11月 pp.98-103.)
- 「大学院における教師教育のモデルケースを提示したい(東京大学)」(『Guideline』2005年11月号 河合塾進学情報センター pp.12-14.)
- 「子どもの想像力を育むアートの教育」(巻頭言『メセナ note』メセナ協議会 2005年11-12月号)
- 「東大が『学校教育高度化専攻』創設へ—トップ水準の大学院で教師教育開発」(『週間教育資料』2006年1月23日 日本教育新聞社)
- 「刊行に寄せて」(佐藤英二『近代日本の数学教育』東京大学出版会 2006年2月 pp. i - ii)
- 「意見広告・教育の志を高く高く掲げよう」(『日本経済新聞』2006年3月27日)
- 「書物復権」(『書物復権2006』パンフレット 2006年4月)
- 「宙づりにされた戦後民主主義」(『週間読書人』2006年7月7日)

<シンポジウム・講演>

- 「専門家の見識を育てる教師教育カリキュラムの認識論的基礎」(教育哲学会第48回大会・研究討議「教師の生成論」香川大学 2005年10月22日)
- 「学力問題と学校の将来像=『学びの共同体』へ」(関西教育学会第57回大会・公開シンポジウム「学力問題とこれからの学校・教育改革を考える」和歌山大学 2005年11月12日)
- 「子どもたちの明日のために=私たちにできること」(毎日新聞社主催シンポジウム 重松清+馳浩(副大臣)+佐藤学+マリ・クリスティーン 2006年3月5日 『毎日新聞』2006年3月25日掲載)
- 「今、求められる教師の力量と教師教育—教える専門家から学びの専門家へ」(基調講演, 教員養成GP「学校教育臨床研修プログラムによる教員養成」シンポジウム 立命館大学文学部 2006年5月13日)
- 「批評・教養の〈場〉再考/再興」(書物復権シンポジウム 佐藤学・姜尚中・高橋哲哉 紀伊国屋ホール 2006年5月16日)

- 「教育の公共性と自律性の再構築へ—グローバル化時代の日本の学校改革」(招待記念講演(通訳・孫于正)韓国教育学会大会 京仁教育大学 韓国 2006年5月26日)
- 「『学びの共同体』づくりとしての学校改革—ヴィジョンと哲学」招待講演(通訳・田輝)中央教育科学研究所 中華人民共和国 2006年7月19日
- 「私の教育学研究=これまでとこれから」招待講演(通訳・鮑威)北京大学教育学院 中国 2006年7月20日
- 「転換期日本における教育改革=危機の現実と教育学の反省」(通訳・王錫宏)開幕招待講演 人民大会中国科学家教育家企業家論壇 人民大会堂 中国 2006年7月21日
- 「『学びの共同体』の哲学と実践」(通訳・王錫宏)招待講演・中国科学家教育家企業家論壇 中国科技会堂 2006年7月22日
- 「協同的学びによる学校改革—学びの共同体のヴィジョンと哲学」第3回日本協同教育学会記念講演 2006年8月5日 南山大学
- 「教職の高度化と専門職化をめぐる情勢」日本教育学会第65回大会 東北大学 2006年8月25日
- Reexamining Japanese Style of Educational Innovation in the Global Age: Dilemmas and Conflicts of School Policies under Decentralization and Deregulation. Invited Keynote Speech, Korean President Committee on Educational Innovation, “Future, Innovation and Educational Strategies” September 4, 2006. Seoul National University. Korea.
- Vision, Strategies and Philosophy of School Innovation in Japan: Designing Schools as Learning Community. Invited Keynote Speech. Korean President Committee on Educational Innovation, “Future, Innovation and Educational Strategies” September 5, 2006. Seoul National University. Korea.
- <対談・座談>
- 「学びは越境する—教育の革命家と家庭医との対話から」(佐藤学+藤沼康樹 『JIM』第16巻第5号 医学書院 pp.412-421.)
- <インタビュー>
- 「中教審『義務教育改革』の矛盾をつく」(全日本教職員組合『クレスコ』大月書店 2005年11月 pp.4-10.)

「戦後教育改革＝壮大な民主主義の実験—佐藤学東大前教育学部長に聞く」(『毎日新聞』2006年4月7日)

「きょうの論点・『民主主義の学校』を崩す」(『朝日新聞』2006年5月22日)

「校長評価の仕組みを」(『毎日新聞』2006年6月5日)

「教職大学院は教師の質の向上につながるか—10年先を見通した教員養成のグランドデザインを」(『季刊・教育法』149号 エイデル研究所 2006年6月 pp.4-13.)

学校開発政策コース

小川正人(教授)

<著書・編著・分担執筆>

- ・『市町村の教育改革が学校を変える 教育委員会制度の可能性』(単著 岩波書店 2006年6月)全150頁
- ・『市民と創る教育改革 検証：志木市の教育政策』(共編著 日本標準 2006年3月)全240頁
- ・『義務教育改革—その争点と地域・学校の取り組み—』(編著 教育開発研究所2005年10月)全227頁
- ・「義務標準法制改革と少人数学級政策—国の学級編制標準40人の改善は実現できるか」(21世紀COEプログラム東京大学大学院教育学研究科・基礎学力研究開発センター編『日本の教育と基礎学力—危機の構図と改革への展望—』明石書店 2006年2月)109頁～141頁

<学会誌、紀要、報告書等>

- ・「三位一体改革と義務教育財政制度の改革課題」(日本教育行政学会年報第31号『義務教育学校「存立」の行政原理を問う』2005年10月)20頁～34頁
- ・『分権改革下の教員給与法制改編に伴う自治体教員給与・人事政策の課題と国際比較研究(第一年度研究成果報告書)』(平成17年度科研費報告書 2006年3月)全168頁
- ・「三位一体改革と義務教育財政システムの構想—中教審・義務教育特別部会審議を踏まえながら—」(東京大学大学院教育学研究科・教育行政学研究室『自治体教育改革と義務教育費国庫負担金問題』〈志木市教育行政調査報告書3〉〈義務教育財政システム再構築研究会報告書〉2006年3月)251頁～267頁
- ・「地方分権と自治体教育行政改革の課題—教育委員会制度改廃論議から考える—」(日本教育法学会年報第35号『教育基本法改正の動向』2006年3月)

76頁～86頁

・「義務教育費国庫負担金改革の争点と分権型教育行財政システムの構想」

(日本教育政策学会年報第13号『教育改革と地方自治』2006年6月)8頁～25頁

・“Local Authorities’ Engagements and Challenges of Policies for Improving Academic Competence- Focusing on Evaluation and the Policy Initiatives to Reduce Class-Size”(東京大学教育学研究科・21世紀COEプログラム 基礎学力研究開発センター『第4回 国際シンポジウム報告書』2005年7月) pp.107-118

<雑誌論文、その他>

- ・「教員評価と給与上の処遇」(『新たな教員評価の導入と展開』教育開発研究所 2006年1月)158頁～161頁
- ・「義務教育行財政システムの改革—1/3 負担金制度化の影響と課題—」(学校教育研究所『教育時評』2006年3月)12頁～15頁
- ・「教育バウチャー論議と新たな公的教育助成の検討課題」(全国市町村国際文化研修所『国際文化研修』2006年 夏季号 第52号)22頁～29頁
- ・「中教審・義務教育特別部会審議(7)」(『悠』ぎょうせい 2005年10月号)
- ・「中教審・義務教育特別部会審議(8)」(『悠』ぎょうせい 2005年11月号)
- ・「中教審・義務教育特別部会審議(9)」(『悠』ぎょうせい 2005年12月号)
- ・「中教審・義務教育特別部会審議(10)」(『悠』ぎょうせい 2006年1月号)
- ・「中教審・義務教育特別部会審議(11)」(『悠』ぎょうせい 2006年2月号)
- ・「中教審・義務教育特別部会審議(最終回)」(『悠』ぎょうせい 2006年3月号)
- ・「就学奨励補助金の見直しと新たな課題」(『悠』ぎょうせい 2006年4月号)
- ・「規制改革会議の義務教育改革方針と教育バウチャー論議(上)」(『悠』ぎょうせい 2006年5月号)
- ・「規制改革会議の義務教育改革方針と教育バウチャー論議(中)」(『悠』ぎょうせい 2006年6月号)
- ・「規制改革会議の義務教育改革方針と教育バウチャー論議(下)」(『悠』ぎょうせい 2006年7月号)
- ・「文科省『義務教育の構造改革』と新教育システム開発プログラム(上)」(『悠』ぎょうせい 2006年8月号)

- ・「文科省『義務教育の構造改革』と新教育システム開発プログラム(下)」(『悠』ぎょうせい 2006年9月号)
- ・「教育委員会制度廃止論への疑問と改革課題—分権化を見据えた権限移譲と制度の大胆な弾力化を—」(日本自治体学会『自治体学会会報誌』116号 2005年11月発行)
- ・新聞寄稿「中教審による教員給与の検討—優秀な人材が教職志す水準と体系に」(『日本教育新聞』2006年9月11日号)

勝野正章(助教授)

<著書：編著書>

勝野正章・藤本典裕編『教育行政学』(学文社, 2005年10月, 151p.)

<著書：分担執筆>

「新しい教員評価の課題と可能性」小川正人編集『義務教育改革 その争点と地域・学校の取り組み』(教育開発研究所, 2005年10月, 227p.) pp.197-209

「教員評価と研修の充実」八尾坂修編著『新たな教員評価の導入と展開』(教育開発研究所, 2006年1月, 227p.) pp.162-165

「子どもに信頼される教師」日本子どもを守る会[編]『子ども白書2006 子どもを大切にす国・しない国 Part. 2』(草土文化, 2006年8月) pp.124-125

<学会誌・紀要論文>

「『公立学校改革』と教員評価・学校評価問題」中部教育学会紀要第5号(2005年10月), pp.57-66

「イギリスの優秀教員制度と教員給与政策」東京大学大学院教育学研究科教育行政学研究室紀要第25号(2006年3月), pp.37-42

「教職課程の認定と評価をめぐる最近の政策について」日本教師教育学会年報 第15号(2006年9月), pp.26-32

<雑誌論文>

「自己申告による目標管理の進め方」『教職研修』教育開発研究所, 2005年10月号, pp.42-45

「子ども, 父母, 地域, 教職員がいっしょにすすめる学校づくり, PTA 活動」

クレスコ編集委員会『クレスコ』大月書店, 2005年12月号, pp.12-13

「教師の『おらかさ』について」歴史教育者協議会編集『歴史地理教育』, 2005年12月号, No.693, pp.56-57

「学校にはなぜ同僚性が必要なのか」日本生活教育連

盟編集『生活教育』, 2006年1月号, pp.51-57

「社会的・道徳的論争問題の授業—イギリスではどう考えられていたか—」歴史教育者協議会編集『歴史地理教育』, 2006年3月増刊号, No.697, pp.16-25

「教育にかける教師, 子ども, 保護者の思い—特集論文を読んで—」さいたま教育文化研究所『さいたまの教育と文化』, No.39, 2006年4月, pp.48-53

「教員評価を力量向上につなげる」『月刊高校教育』学事出版, 2006年7月号, pp.40-43

「教育基本法『改正』案逐条批判 第16条教育行政」『教育』国土社, No.726, pp.60-61

「教職員・親・子どもの対話をとおして信頼関係を築く」クレスコ編集委員会『クレスコ』大月書店, 2006年8月号, pp.12-15

「教育の商品化・市場化と学校評価」『教育』国土社, No.728, pp.92-97

<報告書>

「2002年度研修員の帰国後の追跡調査」『アフガニスタン女子教育支援プログラムとそのインパクト』(平成15年度~17年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書, 研究代表: 栗原尚子) 2006年3月, pp.22-31

「イングランドの教員養成政策の「変化」に関する試論」『教育改革時代における教師の地位と文化: その再編の社会的・歴史的・比較論的研究』(2003年-2005年度科学研究費補助金・基盤研究(A)(1)成果報告書 研究代表者 久富善之) 2006年3月, pp.61-66

<事典>

教育科学研究会編『教育キーワード事典』大月書店, 2006年5月(執筆項目: 「イギリスの教育改革」「学校評価」)

<裁判意見書>

平成16年(行コ)第15号 札幌高等裁判所第3民事部「時間外勤務手当等請求控訴事件」意見書, 2006年1月

教育測定・カリキュラム開発講座(寄附講座)

渡部 洋(寄附講座教員・客員教授)

<論文>

張一平・石井秀宗・渡部 洋・柳井晴夫「確信度応答法における実証的研究」大学入試センター研究開発部, リサーチノート, RN-05-14 2006.3

<報告書>

「はしがき」2005年度／8月公開シンポジウム報告書
「中等教育段階における多角的教育測定—PISAを
超えて—」東京大学大学院教育学研究科教育研究
創発機構 教育測定・カリキュラム(ベネッセコー
ポレーション)講座 2005.12

「はしがき」2005年度研究活動報告書(1)東京大学大
学院教育学研究科教育研究創発機構 教育測定・
カリキュラム(ベネッセコーポレーション)講座
2006.3

「はしがき」2005年度研究活動報告書(2)東京大学大
学院教育学研究科教育研究創発機構 教育測定・
カリキュラム(ベネッセコーポレーション)講座
2006.3

石井秀宗(寄附講座教員・客員助教授)

<研究論文>

Yanai, H., Takane, Y., & Ishii, H. (2006) Non-negative
determinant of a rectangular matrix—its definition
and application to multivariate data analysis. *Linear
algebra and its applications*, 417, 259-274.

伊藤 圭・林 篤裕・椎名久美子・大澤公一・石井秀
宗・柳井晴夫・田栗正章・岩坪秀一・赤根 敦・
麻生武志・岩堀淳一郎・内田千代子・川崎 勝・
齋藤宣彦・武田龍司(2006)医学部学士編入学者選
抜のための総合試験の開発とその評価. 大学入試
センター研究紀要, 35, 49-108.

柳井晴夫・石井秀宗・椎名久美子・鈴木規夫・荒井
克弘(2006)大学生の学習意欲と学力低下に関する
調査研究—1992年調査と2002-4年調査の比較を
中心として. 大学入試研究ジャーナル, 16, 1-9.

林 篤裕・石井秀宗・伊藤 圭・椎名久美子・岩坪
秀一・柳井晴夫(2006)医学部・医科大学の入試形
態とメディカルスクール構想. 大学入試研究ジャー
ナル, 6, 31-39.

椎名久美子・石井秀宗・柳井晴夫(2006)基礎学力評
価のための試作問題の成績に関する入試属性別分
析. 大学入試研究ジャーナル, 16, 133-139.

<研究報告書>

林 篤裕・伊藤 圭・石井秀宗・椎名久美子・大澤
公一・岩坪秀一・柳井晴夫・田栗正章・赤根 敦・
麻生武志・岩堀淳一郎・内田千代子・川崎 勝・
齋藤宣彦・武田龍司(2006)総合試験問題の分析的
研究, 平成15-17年度大学入試センター研究開発
部共同研究報告書.

椎名久美子・石井秀宗・柳井晴夫・林 篤裕(2006)

総合試験問題の分析的研究—総合基礎編, 平成15
-17年度大学入試センター研究開発部共同研究報
告書.

柳井晴夫・石井秀宗・椎名久美子・前田忠彦・伊藤
圭・鈴木規夫・荒井克弘(2006)大学生の学習意欲
と学力低下に関する実証的研究, 平成15-17年度
日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書.
石井秀宗(2006)学力低下とその対策からみる入試改
善の視点: 2005年度研究活動報告書(1), 東京大
学大学院教育学研究科教育測定・カリキュラム開
発(ベネッセコーポレーション)講座, pp.167-173.

<書籍原稿>

石井秀宗(2006)第3章 統計的推論: SPSSによる
統計データ解析—医学・看護学・生物学・心理学
の例題による統計学入門(柳井晴夫・緒方裕光編
著), 現代数学社, pp.85-109.

石井秀宗(2006)第6章 測定の信頼性・妥当性:
SPSSによる統計データ解析—医学・看護学・生
物学・心理学の例題による統計学入門(柳井晴夫・
緒方裕光編著), 現代数学社, pp.158-172.

<その他原稿>

石井秀宗(2005)学習構造に関する研究活動. 大学入
試フォーラム, 28, 63-67.

石井秀宗・柳井晴夫・椎名久美子・前田忠彦・鈴木
規夫・荒井克弘・大竹洋平(2005)大学生の学習意
欲と学力低下に関する教員の意識についての調査
研究. 大学入試フォーラム, 28, 74-75.

石井秀宗・椎名久美子・柳井晴夫・岩坪秀一・荒井
克弘(2005)基礎学力評価のための国語, 数学, 英
語試験問題の開発研究. 大学入試フォーラム, 28,
76-78.

林 篤裕・石井秀宗・伊藤 圭・椎名久美子・岩坪
秀一・柳井晴夫(2005)医学部・医科大学の医学科
における入試のあり方に関する調査研究. 大学入
試フォーラム, 28, 80-81.

石井秀宗(2005)書評「実用 SAS 生物統計ハンドブッ
ク」(浜田知久馬監修/臨床評価研究会(ACE)基礎
解析分科会執筆/SAS Institute Japan 協力). 医
学のあゆみ, 215(2), 145-146.

張 一平・石井秀宗・渡部 洋・柳井晴夫(2006)確
信度応答法における実証的研究. 大学入試センター
研究開発部リサーチノート, RN-05-14.

大澤公一・石井秀宗・岩坪秀一・柳井晴夫(2006)オ
ーストラリアにおけるメディカルスクール入学者選
抜試験の動向. 大学入試センター研究開発部リサー

チノート, RN-05-15.

<講演>

石井秀宗(2005.12.13)テストからのデータの取り出しとその活用. 群馬県総合教育センター.

石井秀宗(2006.7.4)看護研究におけるアンケート作成と統計分析の考え方. 高知大学医学部助教授講師会主催講演会.

<シンポジウム>

石井秀宗(2006.2.4)学力低下とその対策からみる入試改善の視点. 大学入学前に培うべき脂質・学習意欲に関するシンポジウム—入試改善の視点を踏まえて. 長崎県教育センター.

<学会発表・研究会発表等>

伊藤 圭・林 篤裕・椎名久美子・大澤公一・石井秀宗・田栗正章・柳井晴夫(2006)総合試験問題の開発とその評価—医学部学士編入学者選抜を想定して. 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第1回大会研究発表予稿集, pp.137-144.

伊藤 圭・柳井晴夫・林篤裕・椎名久美子・大澤公一・石井秀宗・田栗正章(2006)学力および適性に関する意識調査を利用した総合試験問題の妥当性の検証. 日本テスト学会第4回発表論文抄録集, pp.148-149.

石井秀宗・柳井晴夫(2006)大学教員における学生の学力低下意識に関する一考察. 日本行動計量学会第34回大会発表論文抄録集, pp.144-145.

柳井晴夫・石井秀宗(2006)看護学科における入試科目・資質に関する調査研究. 聖路加看護学会誌(第11回学術大会講演集), 10(2), 31.

石井秀宗・柳井晴夫(2005)大学生の学力低下対策に関する教員の意識—保健・看護学系の特徴. 第25回日本看護科学学会学術集会, p.284.

伊藤 圭・林 篤裕・椎名久美子・大澤公一・石井秀宗・柳井晴夫・田栗正章・岩坪秀一・赤根 敦・麻生武志・岩堀淳一郎・内田千代子・川崎 勝・齋藤宣彦・武田龍司(2006)医学部学士入学者選抜用総合試験の開発とその評価. 医学教育(第38回日本医学教育学会大会予稿集), 37(suppl), 88-89.

村松 仁・角濱春美・藤井博英・石井秀宗・坂井郁恵・中村恵子(2006)精神科訪問看護の効果の認知に関する研究. 日本看護研究学会雑誌(第32回日本看護研究学会学術集会), 29(3), 314.

石井秀宗(2006.2.17)学力低下とその対策に関する大学教員の意識と入試改善. 科学研究費補助金[基盤研究(B)(1)]大学生の学習意欲と学力低下に関

する実証的研究第4回研究会.

Yanai, H., Hayashi, A., Ito, K., Shiina, K., Taguri, M., Ishii, H., & Osawa, K. (2006.3.1) An investigation into admission systems in medical departments of universities in Japan. International Workshop on Entrance Examinations for Medical Universities, National Center for University Entrance Examinations of Japan.

<取材>

渡部 洋・石井秀宗(2006)教育測定に基づいた実践的提言に向けて—東京大学大学院教育学研究科教育測定・カリキュラム開発(ベネッセコーポレーション)講座. BERD, 3, 36-40.

張 一平(寄附講座教員・助手)

<論文>

張 一平・石井秀宗・渡部 洋・柳井晴夫「確信度応答法における実証的研究」大学入試センター研究開発部, リサーチノート, RN-05-14 2006.3

学校教育高度化センター(教育研究創発機構)

藤井 康之(助手)

<分担執筆>

「第三章 学校音楽の変貌—日本フェシズム期—四, 国民学校期北村久雄の音楽教育論」河口道朗監修『音楽教育史論叢 第Ⅱ巻 音楽と近代教育』開成出版, 2005年12月, 211-225頁。

<学会発表>

本多佐保美/藤井康之/佐藤香織/今川恭子/西島央/藤波ゆかり「戦前から戦後にかけての唱歌科・音楽科の教育内容構成の変遷—昭和10年代から20年代の東京高等師範学校附属小学校・国民学校の実践を中心として—」日本音楽教育学会第36回大会, 琉球大学, 2005年10月29日。

基礎学力研究開発センター(COE)

堀 健志(研究拠点形成特任研究員)

<著書・共著>

荻谷剛彦, 安藤理, 内田良, 清水陸美, 藤田武志, 堀健志, 松田洋介, 山田哲也, 『教育改革を評価する』岩波書店, 2006年10月。

<学会発表>

荻谷剛彦, 平沢和司, 堀健志, 安藤理, 「知能・学力・職業キャリア—中高一貫校卒業生データから—」, 日本教育社会学会第58回大会, 大阪教

育大学, 2006年9月

<その他>

犬山市教育委員会主催シンポジウム「教育のまち」コメンテーター(2005年11月5日)

清河幸子(研究拠点形成特任研究員)

<学会発表>

Kiyokawa, S. & Nakazawa, M. Effects of reflective verbalization on insight problem solving. The 5th International Conference of the Cognitive Science, Sheraton Vancouver Wall Centre, 2006年7月.

Kiyokawa, S., Izawa, T., & Ueda, K. Effects of role exchange between task-doing and observing others on insight problem solving. The 28th Annual Conference of the Cognitive Science Society, Sheraton Vancouver Wall Centre, 2006年7月.

Tanaka, D., Kiyokawa, S., Yamada, A., & Shigemasu, K. Investigating the role of selective attention in implicit learning using overlapping letter strings. The 5th International Conference of the Cognitive Science, Sheraton Vancouver Wall Centre, 2006年7月.

Tanaka, D., Kiyokawa, S., Yamada, A., & Shigemasu, K. Role of selective attention in artificial grammar learning. The 28th Annual Conference of the Cognitive Science Society, Sheraton Vancouver Wall Centre, 2006年7月.

清河幸子 言語的な振り返りが潜在学習に及ぼす影響—言語化の構えの影響の検討—. 日本認知科学会第23回大会, 中京大学, 2006年8月.

市川伸一・清河幸子・瀬尾美紀子・村山航・小林寛子・植阪友理 数学の学力・学習力アセスメントテスト“COMPASS”の開発と利用(話題提供). 日本教育心理学会第48回総会, 岡山コンベンションセンター, 2006年9月.

川上泰彦(研究拠点形成特任研究員)

<論文>

川上泰彦「教員人事行政における都道府県教育委員会の機能とその規定要因—市町村教育委員会及び教育事務所との役割分担に着目して—」『義務教育学校「存立」の行政原理を問う(日本教育行政学会年報31)』, 115-132頁, 2005年10月

川上泰彦・橋野晶寛「教育政策の導入過程におけるアクター間関係と制度—構造改革特区を題材に—

『教育社会学研究第78集』(日本教育社会学会), 235-255頁, 2006年5月

<報告書>

川上泰彦「宮城県ヒアリング調査の概要【都道府県・政令指定都市の人事政策】」『東京大学大学院教育学研究科教育行政学研究室紀要第25号』, 111-119頁, 2006年3月

<学会発表>

川上泰彦・橋野晶寛「分権改革下の自治体におけるアクターと制度—教育政策導入の計量分析—」日本教育行政学会第40回大会, 2005年10月

瀬尾美紀子(研究拠点形成特任研究員)

<論文>

「数学の問題解決における質問生成と援助要請の促進—つまりき明確化方略の教授効果—」, 教育心理学研究, 第53巻, pp.441-455, 2005年12月.

<報告書>

Development of Componential assessment for mathematical competences (COMPASS). Center for Research of Core Academic Competences (Eds.), Core academic competences: Policy issues and educational reform. —第4回国際シンポジウム報告書—, pp.145-177, 2006年6月. (Ichikawa, S., Murayama, K., & Uesaka, Yとの共著)

<学会発表>

「学習上の援助要請における教師の役割—指導スタイルとサポートの態度に着目した検討」, 日本教育心理学会第48回総会, 岡山大学, 2006年9月.

「COMPASSの背景・目的・基本的コンセプト」(シンポジウム「数学の学力・学習力アセスメントテスト“COMPASS”の開発と利用」における話題提供) 日本教育心理学会第48回総会, 岡山大学, 2006年9月.